
空に響く歌声

麻香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空に響く歌声

【Nコード】

N9003P

【作者名】

麻香

【あらすじ】

俺、天理 総真は野桐中学二年生

実は“能力者”、でもここでは能力者なのが普通で、街の人口の7割以上がなんかの能力をその身に宿している。

だから、俺は平和で平凡な生活をしている。

ある日突然、変な奴が転校してきた

名前は天童 美希一見、美少女で成績優秀な“完璧な娘”、なんだが……

とにかく、そいつのせいで非日常に巻き込まれちゃった。

俺は平凡な生活が良かったのに(泣)
.....。

第零話 プロローグ

昔話をしよう

かつて、神や精霊の子が地上に降り立った時、世界は変わった。人の姿をして様々な力を操る“それら”に、人間は到底かなわない。しかし、それらは世界を奪うのではなく共存を求めた。各国に配置された、かれらの住み家は、能力者の町とされ普通の人間と扱いが全く違った。

人間たちは、はじめに降り立った子供達を“天子^{てんし}”と呼んだ。

それも二千年前の話で、今は扱っても普通の人間と同じである。政治にも参加していて、そのはじめに降り立った天子の子孫は能力者として多数存在している。

その中でも、とりわけ大きな家計を築いた者達がいた“天兔族^{てんとそく}”と呼ばれる彼らは翼を背に生やし、空を飛ぶ風の使者とされていた。ある者は大物の政治家や発明家や音楽家など様々なことで歴史に関与している。その理由もとりわけ頭のいい血筋であり、力も強く、何よりも天子の中でも最初に降り立った天子の一族だからである。

彼らの本家は二つあり“政^{まつりごと}を行う天童家”と“祭り事^{まつりごと}を行う天理家”が一族をまとめている。彼らは「七つ内まで神の内」という決まりがあり七歳の誕生日の時、天理家の境内で一晩過ごさせ、神から力、つまり翼をもらう。最近では自らそれを望まない者もいるが、皆それぞれ淡い色が付き、操れる物が変わる。しかし、500年に一度、漆黒と白銀の翼を持つ二人の天子が本家からは生まれ、他に

ない強力な力が宿される。

その二人を皆は欲し、幾多もの血が流れる時が来て、世界は乱世の匂いに満ちる

そんな子供が生まれる本家はある一つの土地に結界を張り世界との調和を保ち、暮らす。

“野桐”^{のきり} その土地はそう呼ばれていた

第零話 プロローグ（後書き）

こんにちわ、麻香です。

「空に響く歌声」を読んで頂きありがとうございます。

これが処女作です。

若輩者であまり上手く書けないところが多いと思いますが、頑張つて書くのでよろしく願います。

感想等ありましたら書いて頂けると幸いです。

第巻話 記憶の中の少女

俺が七つの時いや、正確には七歳になった夜。俺は家の境内けいだいに閉じこめられた。

とつても心細い気持ちだったことは覚えてる。

そんな中で何をして過ごしていたかも覚えてない。

でもその後はよく覚えている。

朝、夜明けと共に親父は起こしに来た。俺がなぜこんなことされなきゃいけないと抗議する前に、親父は目を丸くし、俺を抱えて、とつさに母さん呼び俺に古めかしい着物を着させられ俺は、天童家にいった。

武家屋敷のような大きな家の門にたつたときは、知らないのに懐かしい感じがした。

ゆっくり廊下を進んでいると反対側から俺ぐらい、いや、俺より小さいくらいさいくらいの女の子がいた。

かわいいというより綺麗というほうがしっくりくるような顔立ちをしていたが、その目は獲物を見定めるかの様に鋭く、そして無表情であった。

両親に連れられ俺は大きな部屋へ来た。

中には綺麗な顔立ちの女の人と、当主を絵に描いたような男の人と

さっきの女の子が一番奥に座り。ほかに20人ほどが両家の間に綺麗に並んで座っていた。

訳のわからない話し合いを大人達が続ける中、女の子は眉一つ動かさず人形のようにたたずんでいた。

そんな話も七年前の記憶である。

「ふぁーねみー」

俺は天理 総真^{そしま}天理家の次男坊で14歳 野桐中学二年生

ただいま、あさの7時30分 登校の時間だ。

家から距離があるので朝は早い。寝不足なところを兄貴にたたきおこされた日は最悪な朝となって、俺にネガティブさを植え付けていく。

野桐中学は能力者の育成中学トップ3にはいる能力者にとってはすばらしい中学らしいが、全然違う。防弾制服着用で学校に行けばひとつの基地ぐらいの軍備がある、恐ろしい学校だ。

ただいま、8時00分ホームルームの時間だ
今ちょうど、担任の話。

「あーえーっと今日から、転校生が来た。」

一瞬にして教室がざわめいた。えー男？、女？それと能力者？。

誰かが、みんなが一番聞きたいことを聞いてくれた。

そんなざわめきをお構いなしに教室のドアが勢いよく開いた。

バン

教室中に響く、ドアの悲鳴にみんな振り返り、沈黙した。

髪の毛の長さは腰まであり、その色は黒く、右目に前髪をかぶせ視てはいけないと主張しているようだった、そして、綺麗を通り越してし

まったような白い肌に薄く青色の眼が目立っていた。しかし全く表情がなく、まるで、人形が言葉を話しているようだった。沈黙の中に響いたその声は綺麗な声だった。

「天兎族の天童 美希^{みき}と申します。以後お見知りおきを」

教室にいた奴らの反応は二分した

一つはその美麗さに感動してる奴ら

二つは驚いて何も動かなくなる奴ら

後者はほとんど天兎族だった。中にはあきれている奴もいる。

小柄な彼女を視て俺は心の中でこう言っていた 『こいつ、知ってる気がする』

第10話 記憶の中の少女（後書き）

第10話を読んで頂きありがとうございます

次話は2〜3週間後を目安に掲載したいと思っています

第三話 転校生の昔話

私はこの世界は苦手だ。他人も好きではない。

七歳の頃から周りは、会ったときに同じ表情カオをしていた

怒り 恐れ 憎み 妬みねた 尊敬 同情 そして皆、私の前で頭を下げた。

「これはこれは、天子様、ご機嫌いかがですか」

いつもの愛想笑いが見える、きつと私は無表情で言葉を返しているのだろう

「変わりありません」

相手は顔色を変えて去っていった。私がいることは、こいつらにとって恐怖そのものなのだ

そんなのはいつものことで慣れていた

いつも、まじめに接してくれるのは 母 父 そして白兔はくとだけだ。

白兔は私に容姿が似ているが髪は白く、私と違って表情がある、年も16から17くらいだ。驚いたことに彼女は私の世話係らしい。

そんなの続いたのは10歳まで

月が綺麗な夜、幸せがすべて人間達によって壊された。

血の海となった家を視した後、私が何をしてどうしたのかは思い出せない。

とにかく3年間死にもぐるいで生き抜いた

13歳になってから私は家にたどり着いた。そこには白兔一人が、屋敷を綺麗に保っているために、存在していた。というか他の家の使用人は全てあの夜に殺されている。

それから私が普通の人間に戻るまで、もとい、普通の天童家当主になるために使った時間は、8ヶ月だ。そのうち3ヶ月はなにもしなかった。・・・いや、できなかった。倒れたまま3ヶ月間、目を覚まさなかったそうだ。

今、6月中旬、野桐中学に入学することにした。稼ぎは二人分だと少ないので流石に家庭教師を雇うのは少々きつかったのだ。で、天童家と天理家が建てたこの中学なら融通が利くという腐った理由でここに来た。

しかも、ここなら問題が起きてても一般人に知れることなく問題が解決できるしな。

『他人と一緒にいるのは気が引けるがまあ、仕方がない。それ位なら我慢ができる。』

そして、ホームルームとやらに、紹介するらしく、教室の前に待たされた。

『2年3組か』

全部で5クラスあるらしいが、ここのクラスは能力者が多いと話は聞いている。

いきなり、3組がざわめきだした。

『もういいのだろうか』

私は躊躇ちゅうちゆすることなくドアを開けた

別にワクワクもしない。見渡していると、天兔族らしい奴らが驚いている。

無理もないか、私は10歳の時に殺されていることになっている。

「天兔族の、天童 美希と申します、以後お見知りおきを」

私は白兔に習ったとおりに告げた。口元と眉だけで笑みをつくって普通に。

驚いたのは窓側の一番後ろの席に、訳のわからない“気”が満ちている奴がいた。

髪は黒く、瞳は赤く、どちらかという顔立ちを整っている方だろう、私を見て周りとは全く違う反応をしている様に見えた。

『あいつ、たぶん知り合いだったのかもしれない』

私、天童美希の記憶は10歳になる前から昔はほとんど覚えていない。

第参話 美希の転校初日

転校生 天童美希が来たその日。

結局俺の後ろの席が一席分空いていて、そこに美希の机が置かれた。

一時限目 数学

教師が問題を書き終えた後、こういった。

「えーと、天童さん教科書は……………」

「……持ってません」

無表情のまま即答した

「今までどうやって勉強をしていたのですか」

「家の書物を読んで覚えていました」

「はあ……………」

彼女は口に手を当て、考えてからこういった

「その問題が答えることができたなら、よいでしょうか」

立ち上がると黒板に近づき説明をしながら黒を白に埋めていき、しばらくチョークの音が教室に響いていた

「ちなみに、ここをこうすると解りやすいです」

「天童さんそれは、まだ、教えないんだよ」

教師は焦りながらいった

いきなり少しびっくりしたような顔をした。ほとんど無表情でわかりにくい……………」

「えっ、あっ、申し訳ありません」

と書いて黒板の綺麗な字を消し始めた。

「皆様、誠に申し訳ありません、どうぞ、続けてください」
丁寧なお辞儀だった。

そんなところに、割り込むようにしてチャイムが鳴る。

そんな感じで気疲れしてしまう授業が4時間終わった。

休み時間中みんなが、わんさかよってきたが、相変わらず、ほとんど無表情で、言葉を返していた。

- 昼休み -

みんな部活の昼連に行っていて教室はがら空きだった。実際は、俺と美希しかいない。

たまに他のクラスの奴が美人の彼女を見に来ていたが、もうほとんどそれもない。

俺は部活に入っていないので次の授業の準備をしていた。

次の時間は特体（特別体育授業）、戦闘訓練の様な、もとい、そのものの恐ろしい授業だ。

それも、能力者のほとんどが警察や軍人などの仕事に就いたり、普通に生きていても、結局“能力者狩り”という恐ろしいのに狙われるからなんだが……。授業内容がおっかない。

今日は射撃訓練と能力検査だ。“射撃訓練”なんて中学校でやらないだろ普通。

だから、自分の銃を持ってきても、許されてしまつらしい。でも、校内以外の発砲禁止だし、生徒や一般市民に怪我させたら罰もある。だから校内は防弾使用の制服で過ごす訳だ。

この学校や世界では個人の能力の種類（データ）があり、強さもレベルF（無能力者）からレベルS（超能力者）まである、ちなみに俺

は、普通だ。能力検査はどれだけレベルが上がったかを量るものだ。能力によって検査の仕方が変わる。

『こいつはどうなんだろう』不意に聞いてみたくなった。

「なあ、君って能力者だよなあ、レベルっていくつ位なの」席に座ったまま、後ろの席にいた彼女に聞いた。

「きいてどうするの」

態度が今までと全く違い、眉を寄せ、ほおづえをつき退屈そうに窓を視てつぶやいた。

「いや、別に」

「・・・知らない」 「えっ・・・」

「というか、生まれてからはかったことない」 「だって、国で決められて・・・」

「私は、国のルールにはほとんど、当てはまらないんだ」

意味ありげに話したその顔は呆れたような顔をしていた。っていうか、今は無表情じゃ無いんだな。

「もうすぐ、雨が降る」この言葉で話は中断、そして、元の無表情な美少女に戻っていた。

俺は立ち上がりながら「ああ、次は、第二体育館集合だ」といって、彼女は返事をする事なく席を立った。

ちょうど、それに合わせて小雨が降ってきた。『折りたたみ傘持ってたっけ』

下校時には晴れるだろうか。

そんな心配をしながら、第二体育館に向かおうとすると、外に出ていた奴らが戻ってきた。

そして、少し表情を見せた彼女も何事も無かったかのように、もらったのであろう校内の地図を広げていた、やたらと広いからな、この学校。新入生が迷子になるくらいだ。

自分しか視たことないのであろう光景を見た俺は少しながら嬉しかった。

『ああ、こいつも・普通の人みたいなのところがあるんだな』と感じた瞬間だった。

第肆話 二丁の拳銃

第二体育館、射撃訓練室

今は、射撃訓練で拳銃を使って15〜20メートルくらいにある的を狙うんだが、危険なためエアガンを使って行っている。他には射撃部があるくらいで、この特体種目は一年に3時限くらいしかやらない。ようは、使えたほうがよくな。みたいなノリで昔の校長が許したのだ。しかも他の2時限は銃の説明で3時限目が実習だけである。本物を持つてる奴もこの時は使っちゃいけない。

奥で視ていた美希がスツと立ち上がった、出席番号からして俺の前の番。今がそのときだ彼女は立ち位置につくことなくその場でスカートに隠れているホルスターから自前の銃を二丁取り出すと獣のような目で的を狙い撃ち、人型が無惨に頭が無くなるまで

---約5秒---

いや、もつと早かったと思う。あれは確か習った、ベレッタM92 F・でもグリップには双翼と十字架が施ほされている。しかも全体的に黒ではなく白。詳しく知らないので説明できないが、それを二丁同時につかっていた。ものすごい発砲音と粉々になった紙切れと下に転がっているふたつの薬莢じやくしやでわかった。こいつが持つてるのは本物だ。

彼女は黙ってホルスターに拳銃を戻し訓練室をあとにし検査室に向かっていた。皆、彼女の陰が無くなるまで、だまってなにも喋らなかつた。

第二体育館 廊下

検査というのは初めてだ何の能力かもわからないままで平気だろうか一週間ぶりに銃を抜いた。腕も鈍っていなさそうだ。皆、驚いていたがまあ、べつに問題ない。

この二丁に初めてあったのは12歳のころだ。

生きていられるのもこの二丁のおかげだ。今もこの二丁を護身用として常備している。

そう言えば、天理総真には、力の封印がかかった。昼休みに私が何者かも気づいて無かった。だから今まで普通に暮らしてこれたのだろう

『幸せな奴だ』まるで、正反対だな

「まって左じゃなくて右だよ・・えっと天童さん」後ろから声が聞こえた。

幸せな奴のご登場だ。まあどちらにせよ、危害を加えるのなら存在も残らないほどに

『殺してやる』

彼女は鋭い目つきで総真を見返した。しかし、それに似合わず美希の肩は小刻みに震えていた。

『なぜ、私は何も知らずに生きていけなかったのだろう・・・・・』

第五話 廊下の雨音

俺が射撃のテストを終えて、検査室に向かった。長い廊下を雨の音だけが支配する。

『なぜ美希が銃を二丁も持っているのか』頭の中を疑問が渦巻いていた

すると前に彼女が現れた。11歳ぐらいの背の高さだが体のラインはしっかり女らしく、何よりも長い黒髪が窓の光に反射して青に光って見えるのがどこか周りとは違うオーラをまとっていた。何だか重いものを背負ったような背中からは隙のなさがうかがえる。

彼女は分かれ道にたって立ち往生しているようで左に歩こうとしていた

「まって、左じゃなくて右だよ」検査の場所は右にあるぞ。

彼女は振り返ると無表情で冷たい目をしていて、後になって黒髪が動きを追いかけるようにしてついでに行き180度回転して彼女は制止する。それと同時に俺は彼女の美しさに息をのんだ。

「えっと・・・天童さん」

彼女は瞬時に青い目を俺に向けていた。彼女の感情を一気に表したような眼からは獣のように人を狩る猛禽類と何かに怯えるような小動物の様に感じた。

「なんなら、案内しようか」

俺はとりあえず笑顔を見せるが彼女は表情を崩さない、まるで、地獄のにらめっこみたいだ。相手から殺意がしみ出ている。

しかし、俺が歩くにつれてきた。どっちなんだよ、女ってわかんね

」。

「そういえば、よく雨降るのがわかったね。それが能力なの？」

「知らない……」

顔を下に向けたままそういつてすぐに返してきた。

「……おまえが、そつちを聞いてくるのは意外だったな」

「えっ」

正直驚いた、いきなり昼休みの彼女になっていたらしい。助かったく、「知らない」だけだったらまた黙ったままだったからな。俺は耐えられなかっただろう。というか、いきなり“おまえ”って……。

「能力を一度も測ったことがないんだっけ」

「そうだ、この世のルールに従っていないんだ。怖くないのか」

「べつに、君が俺を殺さないんだったら、怖くない」

すでに殺しそうな目つきなんだけど……。

「はっ、笑わずな。でも普通だったら、“殺す”ではなく“壊す”では無いのか」

「……どういうことだ」

「ああ、肉体面より精神面だ。人間なんて心を壊されれば生きていても死んでいると同じ。ほとんど生き地獄を味わうことになる。おまえは、それを恐れないのか」

「生きていれば立ち直れるし、死んでから彷徨う方が俺は怖い」

自分が何言っただか分かんなくなってきた。でも何でこいつ昼休みからこんなに口調が違うんだ？もしかして二重人格なのか？話が理解しにくいぞ。

「そうか、確かに幸せな奴は立ち直れると言いきれるんだな」

辛そうな表情を浮かべて美希は言った

「君はどうなの」何でそんな顔をするんだ？

「世界中が自分を殺そうとするか利用しようとしてくる」それも永遠に、どう思う?」

「気が引ける。だけど、君は一人だったのか」

「……孤独な天の歌姫（天のセイレーン）それが私の通り名だ」

「……セイレーンってなに?」

「死の歌を唄い人を惑わす妖怪みたいな物だ」 殺意を込めたような笑顔の美希

「でも、君は妖怪じゃないんじゃないかな」

負けじと俺は社交的な笑顔を崩さず言った。

「実はそうでもないかも知れないぞ」

彼女は悲しみの感情の中に笑みを浮かべてそういった。

これ以上聞くと、いろいろと戻れなくなりそうで俺は喋るのをやめた。

でも、それから1分には検査室に着くいていた。ものすごく長い1分だった気がする。

「さっきのことは、どうかご内密によろしく願います。」

無表情の彼女は起伏のない単調な声でそういった。

ここは“天兔族専用特別検査室”……最先端の科学で能力測定をする場所だ。

名前の通り天兔族仕様になっているらしい。世界の人口の0.8割が天兔族だって話だからな。

何事もなかったように美希は扉を開けた。

それが、俺にとって今日一日の災厄の始まりだった気がする。

第陸話 椛の検査室

最新の機器が並ぶ検査室に入ったら、目の前の教師烏水 椛がこちらに向かつて座りながら椅子を回すと、いきなりニヤリとしだした。「あらあら、二人ってそういう関係だったのお」

朱茶色のセミロングを適当に束ねた髪に、眼鏡をかけた白衣姿で行儀悪く足を組んでいた。見た目は色っぽい美人。おまけに若いので生徒に絶大な人気を誇っている。

職業は能力科の女教師で、力も強くランクはAだとか。

「断じて違います」

ちなみに、おれの遠い親戚らしく生徒と言うより弟の様な扱いで昔から会っていてプライベートで会うときは“椛姉さん”と呼んでいる

「天童美希と申します、あなたは・・・なぜここに」

美希が作り笑顔をして自己紹介した。

「烏水 椛と申します。訳があつてここで能力の制御装置の研究をしています」

あわせるようにして姉さんが丁寧に挨拶した。

「烏水・・・なら知つてて当然だな」いきなり、裏の美希が出現した。

「もしかして、二人は知り合いなのか？」初対面にこの性格で美希は話さないはず・・・

「いや、一族としては知っているだけで、彼女個人に会うのは初めてだ。」

「へー」わけわかんねー

「これから世話になる、美希で良いぞ。」

「かしこまりました」「敬語もだ」 美希が完璧に怒っているのを
視て姉さんは……。

「わかりました……検査の仕方は知らないですね美希さん」

何だ今のやりとり

「総真くんと一緒に特別コースが良いかしら」

「ちよつと待つて姉さん」「なんですか総真くん」

「良いのか、だって天兔族の本家だけなんだろう」

「私は天童家本家だ。なんの問題もない」

きよとんとした顔で美希が言う……へーそうだったんだ……。

「そう、美希さんは事実上、天兔族の女王様と言っても良い人・
本家なのよ」

「えっ、じゃあ、天童つて……え……」
政まつりをする天童家なのか！？でも、確か何年前に、全滅したって聞
いたぞ！……。

「で何をする椀」

「名前でよんでくれるのは嬉しい限りね美希ちゃん」ほつとかれま
した、俺。

「……目的は」「能力の暴走の範囲を調べることが主ね……」
しかし、俺はなんでこんな急展開に付き合わなきゃならないんだ。
無視をして美希と椀が話している間、総真は部屋の隅で頭を抱え込
んでいた。

それにしても、美希の不機嫌さが、いつこつに減らないんだけど

「じゃあ着替えるか」「まって……その隠れている総真くんを目隠
した方が良くもよ」

「めんどくさい、血まみれになるし」「……美希ちゃん“目つ

ぶし”と“目隠し”は違うの。まあ、わたしが見張ってるからその間に着替えて”

さらっと流したけど俺もしかしたら眼が潰されてたかも知れなかったんだよなあ美希は発想が狂ってやがる。まてよ・・・ここで着替えるのか？よやばくないかよそれ

「ごめんね、総真くん・・・はいこれつけて”

姉さんに渡されたのは黒いはちまきの様な布だった。

目隠しを俺が巻いた後すぐに、しゆるしゆると衣擦きこすれの音と共に金属が机におかれる音がした。たぶんさっきの拳銃だろう。

「全部ここに置いてね、機材壊したくないし」椀姉さんの声が近くからした。

まずいな、これ・・・見えないと妙にエロいぞ・・・。

美希の服から次々と武器らしき物が机に置かれている、そんなに持つてきても学校はゆるしてるのかよッ・・・本当におかしい学校だな警察に捕まるんじゃないか？

俺が唾を飲み込むとまた椀姉さんが

「ああその横に置いてある着物に着替えて”と真上から聞こえた。俺はというと検査室の机のそばに小さくうずくまっているのである。今、美希は下着ってことだよな・・・。

『この状況、きついな』

（3分後）

「良いよ外すから待ってて”するすると布が外された。白い寝間着（着物）の美希が恥ずかしそうにしていた。その瞬間・・・ガッン

- - -

「・・・っ！・・・痛ってー！！」「いい音したわね」

美希に問答無用でローキックを喰らって後ろの机の角に頭がぶつかった。桜姉さんはにこやかに見物している・・・理不尽だ。赤面しながら美希がそっぽを向くのと同時に姉さんがこの事件を切り上げた。

「そのドアあけたら中の部屋でまっつて」「・・・」「美希は立ち止まっている

驚いた顔をした姉さんと警戒する美希。何かに気づいたかのように姉さんが

「ああ、大丈夫、強力な結界が張られてあるから、誰にも気づかないよ」

にこつと笑った美希はとにかく可愛かった。

・・・かたん・・・

ドアが閉まると桜姉さんは顔を変え独り言をつぶやいた
「・・・そろそろ、話した方が良いかしら」

パイプ椅子を自分の席の対面に置いて。

桜姉さんは自分の椅子に座りパソコンをいじり始めた。

『そこに座りなさい、天理総真くん、・・・いいえクロノスの天子様』

第漆話 漆黒の天子

桜姉さんはとっても真面目な顔をしていた。彼女の話した話はおとぎばなしの様だった。

「“世界の起源の物語” もう歴史で習ったかしら」眼鏡から鋭い視線が、俺に向けられる

「はい、天子と人間達の話ですよ」怖さで敬語になった俺・・・情けねえ。

「そう、天兔族の翼には色が付いている」

「はい、現に兄貴も群青と白を掛け合わせた様な色してます」

「およそ、500年に一度、白銀と漆黒の天兔が生まれるのも知ってるわね」

俺は頷いて見せた。天兔族の昔話みたいなものだ。

「貴方の翼は」 「黒色です」 「なんでそうなると思うっ？」

「烏天狗の血が混じってるから・・・」 「・・・それは、間違いよ」桜姉さんはんぱつ入れずにいった

なぜだ、親父も母さんも親戚もそう言ってたぞ

「・・・貴方の翼は漆黒。500年に一度の天子、クロノスの生まれ変わりよ」

淡々と話した桜姉さんの目は冷たかった。俺を無視してパソコンを

いじり始める

「美希ちゃん翼を広げて良いわよ」優しそうな声で検査中の美希に伝える。

「そして・・・これ視てみて」モニターに翼を広げた美希が映されていた。「真っ白だそれに反射して光ってる」　「白銀の天子、ウラノス。またの名を天童美希」

「でも本来は白が男、黒が女らしいわ伝書によると」普通の声で姉さんは言った

「なんで？」

「太極たいきょく図ずってわかるかしら、詳しく説明してる時間なさそうだから・・・この白と黒の勾玉が合体したみたいなの」

たくさんあるパソコンの画面の中の一つにそのままの図が映し出された

「・・・」しらねーよそんなこと

「ともかく、黒が陰性、白が陽性でね男女に分けると、女が陰性、男が陽性になるの」

「ってことは天子は男と女一人ずつだったのか？」

「わからないわ、自分に聞いたら？」「は？」姉さんがにやりと笑った

「伝書によると、前世の記憶が残ってるみたいだから、その空間こじ開ければわかるわよ」

「先代の天子達の記憶って事」　「ええ、まあ総真の場合女の記憶の可能性、があるから、けっこうつらいと思うわ」　「なんで？」

「あなた達の前の代のクロノスは女でそれはそれは苦しむ死に方し たって話は本当よ」

「・・・ツなんで」

「あなた達の価値は考えられないくらい大きいわ、非力な女の方が捕まえやすかったんでしょ」
「黒は白より弱いのか？」やばいじゃん・・・俺

「いいえ、力は種類が違っても対等よ、両方得意分野が違うからね、理由は女だったこと」
「・・・」
「いくつもの想像の場面が、全部、美希の姿で頭をまわっていた。

「記憶には痛さや苦しさと感情がある、感覚がそのまま伝わってしまふ。それに耐えられる精神の強さは、人間の体には無いと思うわ」

「つまり、記憶をたどるのはやめとけと」

「総真は理解が早いほうで助かるわ、そういうことよ」

「じゃあ、いつか捕まるんだろ、どうすればいい」
「現実にも目をそらさないこと」

そう言つて画面の美希を指した、彼女の翼は左翼だけよく見ると小さかった。

怪我？それとも・・・姉さんの言葉がよみがえってくる・・・まさか・・・な・・・。

「まだですか？」
不機嫌そうな美希の声が聞こえる。どうやら翼を出しているのが嫌みたいだ。
「ああ待って、唄うたってみてよ」
明るい笑顔で桜姉さんが言う。

「死にたいのか？」

いきなり鋭い声で言った美希は、人を殺しかねない目をしていた。

「そこ防音室だし、私たちは死なないと思うわ。保証はないけど」

「じゃあポリュヒニアにする」

「どういう歌？」
なんか、美希が唄うたうらしい

「耳栓しなくても平気だ、普通に賛歌だから酔よっぱらったみたいに

気楽になるだけよ』

「安らぎの歌かしら」『似たような物』そう言って美希は唄い始めた
美希は何語わからない言葉を唄として紡ぐ

透明な美声は、空にまで届きそうなくらいよく響く。

みんなをいたわり安らぎを与えている。

寂しい、悲しい、苦しい、辛い、怖い、痛い 何だこの声。頭に
割り込んでくるッ！
その声に俺は飲み込まれた感じがした。

綺麗な月光が映し出す姿は小さな少女、足下には無限に広がる死体
の山。

背中にある白銀の双翼が光に照らされ白く輝いていた。

しかし、彼女の着物は大量の血を浴び、紅く染まっている。
彼女の手には一降りの刀。その刃には血がこびり付いている。
涙も流さずただ月を眺めるその顔は無表情でまるで精巧に造られた
人形の様だった。

その横顔がこちらを向いてくる。目は空のような青さで光り輝き右
目に真っ赤な線が走っていた。うつろに開いている目と口元だけの
笑み、白い肌が付いた鮮血は彼女が異常な存在だと世に知らしめて
いる様だった。

第捌話 銀髪の娘

「はっ・・・ウラノス、姫！やめてあげて！！」

椀姉さんの声で唄が瞬時にやんだ。

異常を感じた美希は眉間にしわを寄せ椀の見て居るであろう監視力メラを睨む。

何かを察したのか顔を青くし美希がものすごい勢いでドアを開けた
「なぜ？いや、知っていたが、これほどだったとは」

いつの間にか美希が気を失った総真のそばに来ていた

総真は壁にもたれ掛かる様にしていて、苦しそうな表情をしていた。

「苦しかったか、すまない、お前に背負わす事はしてはいけなかったのにな」

美希の哀しそうな目で言った言葉は、総真には聞こえるはずがなかった。

「しばらく、休ませた方が良いな、校内じゃなく静かなところが良いか・・・」

「保健室はだめなのかな？美希ちゃん」

二人は倒れた人を何人も見てきた様な冷静さで話し出した

「だめだ、休ませる理由が無い、しかも、いまのこいつのは精神的ダメージが大きすぎる」

「家に帰らせるとか？」 「どの神社？」

「ああ、天理の神社って沢山あるんだっけ、ええっと、美希ちゃん
の家に一番近いところじゃないかしら」

「しょうがない、責任上私が送る。家の運び屋をよんでおくから、

椛は適当に理由付けをして置いてくれ」

椛は真面目な顔で首を縦に振った。

「わかりました。だけど、あなた達二人一緒に帰ったら間違いなくいや、最低でも天兔族と天狗一族の子達はいかがわしい眼で視ると思うけど」 美希はジト目で

「……中学二年生ってそんなものなの？」 「だいたいは」

椛は笑顔で答えた。

「ばかばかしいと小声で言ってから美希は大きなため息をついた

「仕方ないじゃあ、私はそのまま授業にでる。世話役がいるからそいつに面倒見させる」

「わかった、総真くんはここで迎えを待つ感じで良いのかしら？」

「それで良いだろう、ああ、あと診断結果どうすれば良いんだ？」

「貴方の場合は、もういつそSで良いんじゃない」「アバウトだな。でも、それだと目立つからAの方が良いんじゃないか？」

「えっとね、美希ちゃん美人だし目立つのよ、下手に誤魔化すより可能性無限大って感じにしちゃえば的確なデータは漏れないんじゃないかしら」

「わかった、ところで着替えるから、総真に目隠ししてくれない」

「大丈夫、大丈夫、気失ってるから、分かんないわよ」

「……なんか、嫌……」

「わかったわ」ふてくされる美希を苦笑いをして椛は眺めていた。

美希が無造作に総真に目隠しをつけたかと思うとたった1分で着替

え終わってしまった。

拳銃をホルスターにしまおうとすぐに椀の電話を借りて誰かに連絡を始めた。

「ああ、私だ、いろいろあってな。一人天理を運んでくれないか？」

「× *」

「・・・よし“10秒”で来い」「!？」

美希が当たり前のように言った言葉に椀はあ然とした。無理もない美希の家はここから2?強はなれている。とても10秒でこれるはずがなかった。

そして、きっかり10秒

.....バサバサツという音がしたかと思うと着物姿の娘が一人、翼を生やした狼みたいな生き物に乗って天そらから降ってきた。

しかも、美希そっくり・・・。違うところと言えば髪は黒ではなく銀髪。目は綺麗な青じゃなくて金色に輝いている。そして、この完璧な笑顔はたぶん美希には作れないだろう。

一番似ていない所は左の眼球の瞳孔の周りに一つの紅い線がはしっていることだ。

外に乗ってきた生き物を置いて、校内に入る。研究室のドアをノックし、あけるとすぐに美希を見つけ、美希の目の前に来て片膝を付いている。しかし、彼女は雨のせいでズブ濡れになっていた。

「お嬢様ただいま参りました」

軽く頷いたかと思うと美希は黙って総真を指さした

「こちらの殿方が天理のご子息ですか？」

「ええ、そうよ」

椛が言葉を返すと血相を変え、立ち上がり美希と椛の間に自分を移動させる

「どちら様ですか？」眉を寄せた顔は裏の美希そっくりだ

「名を訪ねるときは己から名乗れ、白兔」美希は無表情のまま淡々と告げた。

それに、反応するように白兔と呼ばれた娘はピクリと動き「申し訳ありません」と即座に返してきた。

「私、天童 美希様の側近を務めさせていただいておりますあまかざ天風白唯しゆいと申します。お嬢様には白兔はくとと呼ばれていますどうぞよしなに」

「これはこれはご丁寧に、わたしは烏水 椛。烏天狗の一族で能力制御装置を開発しているわ、よろしくね白唯ちゃん」

「……」対応に困る白兔をよそに美希は総真を指さした

「荷物はあれだから、よろしく」

「わかりました」瞬時に美希に笑顔を振りまく白兔を無視して美希は話を進める。

「丁寧に運べよ、一応は漆黒の天子だ」美希は冷たい目で総真を見て、小さな舌打ちをしていた。

「では、警備はお嬢様と同じようにさせて頂いてもよろしいでしょうか」

「わかった、あいつらを使っても良いぞ」相変わらず無愛想な美希と愛想を振りまく白兔。

「お心遣い感謝します」と言い白兔は一礼した。

“白兔を気遣わず無表情で淡々と命令する美希”

“美希の命令には絶対逆らわず笑顔で従う白兔”

その二人は、まるで絶対的な“縛り”があるように見えた。
血のつながりでは無く何か深い縁の様なモノで……。

第玖話 天童家の当主

白兔の周りに浅く水溜まりができてきた。
時折、ぴしゃりと水がおちる音が響く。

白兔はそれを無視して、自分の携帯をいじって誰かに連絡をしていた。

見かねた、椀が彼女にバスタオルをかけた。

すると、白兔は笑顔で礼を言った。

数分後

「天理様のご帰宅の用意が調いました」

「よし、では私は授業に戻るぞ」

「と言っても、あと3分ぐらいで5時限目が終わって、ホームルームと部活見学しかやること無いと思うわよ。」

「それもそうだがな、部活見学を楽しんで帰るとするか」

（美希、下校中）

部活動見学では検査結果をSにしたせいで、射撃部と文化部一部と運動部全般に体験に付き合わされかなり疲れた。

今日は迎えをあいつの護衛につけてしまったので、徒歩で帰る事にした。

何で飛ばないかというところ・・・少々問題が発生するからだ。

まあ、飛ばばすぐ着くんだがな。2?強をのんびり歩いて帰っていると、大きなやしろに着いた。

ここが、天理家本家、用はあいつの自宅と言うことになる。長った

らしい階段が小さな山の中腹まで続いている。鳥居は階段のを合わせて7つ。説明は省かせてもらうが、天兔族にとって“七”と言う数字はとても重要な数字に当たるのだ。

まあ、そんなことはさておき、その上の社はとても立派な作りをしている（とつても大きい神社を想像してもらえばわかりやすいかも知れないな）。

そこでは、月に一度、会合が開かれる。天理は祭り事を率いる家だからもちろん能力的な面での話し合いになる。

これが、めんどくさいのだ、私も一応は現当主なので必ず出席する。話し合いの途中、しばらくしてから幹部の古株共が文句を言ってくるのを黙らせるのが面倒なのだ。あれは、本当に憂鬱になる。

小さなため息を漏らし、まっすぐ足を進めていく。実はここから100〜200mすれば自宅なのだ。これから、夜中まで当主としての仕事に追われる羽目になる。

今日もこれから、会議が一件、事件が三件、緊急会議がさつき入ったと白兔が知らせてきた。

事件というのは、能力者が時折、犯罪に能力を使って事件を起こす。しかし、警察ではそんな“あり得ないモノ”は扱いきれなくなる。そこで、天童家に国から直接依頼されたのがこの仕事だ。だから、天童家は能力者専門の警察として会社を一つ築き上げた。それをきっかけに、幅広く企業を立ち上げ、今では国の財政のほとんどをまかなう程になってしまったのだ。

用は、当主になるとそれらの企業を取り仕切る事になり、多額の財産が得られるのだ。

だけど、天兔族と人間は似て非なるモノだから、それ程物欲が激しいわけではない。気付いたら、こんなになっただけで、生活に必要な物以外を買うことは滅多にないのだ。だから、自然と金が貯まっただけの話だ。

「まあ、それを狙ってくる者は山ほど居るんだがな……」

そろそろ、自宅に到着する。やたらと広い武家屋敷みたいな家は寂しさが増していた。大きな門の前には白兔が出迎えている。

「お帰りなさいませ、お疲れ様でした。主様^{ぬしさま}」

「相変わらず、笑顔が上手いなお前は……」

そうして、彼女の転校初日は終わり、彼女の“当主”としての日常が始まる……。

第拾話 天理家の生活

目が覚めたら、自分の部屋にいた。

妙にリアルな悪夢を見た。夢のせいなのかは分からないが、頭が痛い。

今、ちょうど部活が終わって帰る時間帯だ。

壁掛けの時計を見て目覚める前の事を必死に思い出す

「くそっ……何時間寝てたんだ？俺は……」

確か五時間目に……あんまり思い出せない。なんか、よく分かん。夢が印象に残りすぎたせいなのかも知れないな。

「とりあえず、なぜ俺は家に居るんだ!？」

考えるのが面倒になった頃。

「……まあいいや、どーでも」

鞆もあるしな。

“どれだけ深く考えてもそれ以上に深い泉に真実は存在する” なんかの本にあった言葉だ。

俺はこの言葉が気に入っている。用はあまり考え込んでも分からないものは分からない。ならば、分からないままでも構わない。つまり、無関心と言うことだ。この性格のおかげで今まで平和に暮らしてきた。

下の階から母さんが呼んでいる。そう言えば、もう飯の時間だ。

この時間を逃したら、今日の晩飯は抜きになる。そう言うルールなんだ。

理由を加えれば親父も兄貴も天兔族の会議とやらに出席しなければいけないからだ。

「遅いぞ、総真」兄貴が偉そうに足を組んで座っていた。相変わらず、憎たらしいなこいつは。成績も上位、ランクもA、オマケにスポーツ万能である俺の兄貴は、天理家の跡取りとなっている。俺は次男なのでそんな得点もなし。成績中の上、ランクC、運動神経が少し良いくらいで何の取り柄もない。

次男が居ると言うことは、長男にとっては嫌なことらしい。特に俺たちみたいな家系で能力を司る人間の本家はその一族をまとめる義務があるらしく。兄貴は俺にその座をとられて自分が惨めな思いをしたくないらしい……。だから、あまり仲が良くない。

つま、俺には関係ないが……。だって跡継ぎ争いなんて面倒だろ、それなら平凡に暮らしている方がよっぽど良いとは思わないか？

そんなこんなで、妙に緊張の糸が張りつめたこの食卓をいつもは嫌な気がしていたが、今日はなぜかそんな気がしない…………。

食事を食べ終わると俺はすぐ部屋に戻ってしまう。この家は外から見ると平屋に見えるが実は二階建てである。

それからいつものように宿題をしたりグダグダとマンガやテレビ、インターネットで暇を潰す。下の階では家にいる巫女が騒いでいる。たぶん今日もここで会議が開かれるのだろう。なぜか知らんが会議の時は2階でおとなしくしているように言われていた。

そのかわり俺は、平凡な日常を約束されているのだ。

その日はこのまま寝てしまっていたらしい、目が覚めたら次の日の朝だった。

次の日

天気は曇天、今にも雨が降りそうだ。

家の巫女たちに傘を持たされて俺は登校した。

「ちっっ・蒸し暑ちいーな」

6月だから仕方ねーけどな

能力者の街“野桐”は都会と田舎の中間みたいなところだ。一步中心を離れたらド田舎みたいな田んぼが広がっている。

その田んぼを横切ってバスに乗っていけば野桐中学校が見えてくる。野桐中もどちらかというとその田舎の部分だ。

「まあ、校門をくぐれば最新の教育施設なんだがな」

周りが草木に囲まれている校舎は隠れるようにしてたたずんでいた。

昼休み

あいつは、今日は一言も話しかけては来なかった。

と言うより、能力診断でまさかのSランクをとってしまったって、今や校内の有名人だ。

俺なんかと話している暇もない……

教室は静寂に包まれていた。今にも降りそうな雲が何となく不安を感じさせていた。

ほとんど笑顔が無表情しか周りに見せない彼女は、俺の後ろではおづえをついて哀しそうに空を見上げていた。

何となく話しかけづらいその表情はとても儚げで綺麗だった。

第拾巻話 SランクとCランク

美希が転校してきて丁度1ヶ月がすぎようとしていた頃だった。ジメジメした梅雨が終わりそうなとき、つまり6月末だ。

この学校には普通のテストだけではなく能力のテストがある。それは“筆記・実技・検査”に別れていて、この間のは検査にあたる。

で、次が実技なわけなんだが……。

面倒なんだなコレが。まあ、トーナメント式に対戦していくんだがこれが体育大会のお遊戯みたいな感覚ではなく、戦争さながらのマジな喧嘩とほぼ同等だから怪我人が出るのが当たり前……。

親は文句言わないかというのと、能力者の家系は各家庭で誇りを持っていらつしやるので、承諾している。もちろん、実技と検査は能力者だけのイベントであって、一般生徒は筆記だけとなる。これが最低でも4試合は受けないと順位が決定しないから困る。しかし、俺の場合は天理家の恥さらしをしないようにしなければ平凡な生活が約束されないため、これだけは死にもものぐるいで戦うのだ。

第1体育館 儀式室

その、くじ引きを今行っている所だ。ランク別、学年混合で行われるので実力勝負だ。

『C-17』我ながらどーでも良さそうな数字をひいたものだ。

「君は、C-17みたいだね。僕はB-32だったよ」

と小さな紙切れを見せるこいつは篠原 悠斗ランクはBで背は少し低め、いつも笑顔を絶やさず、クラスでは目立たないが良い奴として知られている。

まあ、俺の友達でもある。

「おつ、俺はB-25だ。天理、残念だったな」

「なにがだ？勝呂」

この大柄な奴は 勝呂 啓太だ。篠原と同じようにこいつも友達である。ランクはBだが名のある武闘家の跡取りで強いのに平和主義で頼れる奴だ。クラスでも力仕事を担当している。……しかし、まれに自信過剰？が出てくるのが傷だな。

「お前、クール&ビューティー転校生『天童 美希』。狙ってたろ初めから」

「何でそうなるんだよ」「顔に書いてあるぜ。だが、あきらめろ、俺の華麗な能力対戦ぶりに彼女は俺に惚れるわけ」

「あつそ、あいつは勝呂のこと気にもとめてねーと思うぞ」

篠「余裕だね天理くん」「お前まで、つんなことって……」
勝「そんな件の姫君はSランクだもんな、Aランクに混ざるらしいが実力はいかほどかな」篠「まあSだから相当能力値は高いだろうね、それと拳銃はプロ並みだったし」

勝「ああ、早く姫君の翼の生えた姿を見たい」

理「美希は本気は出さないとと思うぞ」

「なんでなの？、天理くん」「ん？そんな気がするんだ、たぶんあいつには必要がない」

勝「ふーん……それはともかく、さっきから天童さんのことをあいつだの美希だの、親しげに呼ぶではありませんか。天理 総真くん？」

勝呂は笑顔のまま指を鳴らし始めた。悪寒がはしったそのとき辺りが一気にざわめいた。三人ともみんなの視線をたどっていくと……。

ステージ後ろにあったモニターに表示されたその名前は美希だった。もう、注目の的となっていたあいつはA-7になつたらしい。対戦は見学できるのでみんな把握しておきたかつたんだろ。

ステージから降りていく美希は無表情だった。彼女の足音は周りの雑音にかき消され、みんな注目しているのに周りに同化しているそんな気がした。

放課後

げた箱に向かうと美希にばったり会った。

「もう帰るのか？お前、部活は？」

しかし、美希は人形のように眉ひとつ動かさず、げた箱から靴を取り出して完璧に無視して帰ろうとした。まるで、聞こえていないかのように。

さすがに、腹が立った。無視とはどーゆー事ですかねえ？（怒）

「おい、お前」

美希の肩に手をかけ無理矢理引っ張ってみた。すると、全く微動だにしない……。

動きは完璧に止まっているのだが、こっちがいくら力を腕にこめても逆に美希は全身で俺の方に向かないように頑張っていた。

約1分ほど力比べをしていたら、美希が俺の右手をいきなり掴んだ。「なに？」冷たい声が響いた

一瞬にして右手をとられたまま、後方に回られた。右腕がひねられてギシギシ言いそうなくらい力を入れられている。っ痛いんですけど（涙）

「お前は、人が声をかけているのに無視をする薄情な奴なのか？」

「おまえって誰？まさか私の事言っているの？」 「ああそうだ」

「私は、天童 美希よ。“天理”なのに私のことが分からないの？」
美希が手の力をより強めながら、とても小さい声でいった。

「貴様はクロノスのくせにウラノスのことも分からないのか？」

第拾弐話 疑問と帰り道

「貴様はクロノスのくせにウラノスのことも分からないのか？」

彼女は俺の後ろでそう言った。その声は別人の様に冷たく低い声だった。

今、俺は美希に右腕をとられている。寄りかかれば折れてしまいそうな彼女の小さな腕には似合わない程の力に俺の腕が悲鳴をあげていた。俺は激痛のせいで言葉も出せない。

今度は訴えるように美希は総真に質問した。

「おまえは私のことを本当に覚えていないのか？」覚えてる？何の話だ？

「すまん……俺が美希に初めてあつたのは、美希が転校してきた日のことだ」

「そう……か……」さっきとは対照的に弱々しい小さな声だった。

それと同時に美希は総真の腕をはなし、まるで人形のようにへたり込んだ。

涙を流すこともなく、ただ放心状態で動かない美希。こいつは何が言いたいんだ？

「やつぱり、お前でも駄目か……」

美希は総真に聞こえないくらいの声で呟いた。

総真は美希の目線の高さまでしゃがんだ。のぞき込むと彼女の顔が険しくなっている。

「……なあ、どういう事だ？……ウラノスだっけ？それって何なの？」

おい！この状況でなに言っただやがる！俺！

頭を抱えながら、焦^{あせ}っている総真を見て。美希は呆れたようにため息をついた。

「・・・本当に、おまえの父親は何も教えなかったんだな」

そして、獣のような鋭い目つきで総真を睨んだ。彼女は起きあがり大きなため息をまたつく。総真は馬鹿にされている様で少し腹が立つてきた。

「まあいい、今日はお前の家に寄るとしよう・・・」
「はあ!?」

そう言うと、美希は総真を無視して携帯を開き、電話をかけ始めた。どうやら、家族に連絡しているらしい。一通り相手に話し終えたら、電話を切った。

「よし、帰るとするか」

と言って、美希はさっきの事は嘘のように歩き始めた。

仕方なく、総真は美希について行った。美希は総真に道も聞かず、ただ黙々と神社に足を運んでいた。道なんて聞かなくても知っているかのように・・・

そういえば俺、質問してから答え聞いてなくね!?

「なあ、何でおま・・・天童が俺の家に行く話になんの?」
「・・・」

「美希、教えるよ」「お前には関係の無いことだ。あと、周りに気を遣え」

辺りを見回すと、同じ学校の奴らが俺たちを傍観していた。通る奴のほとんどが振り返る、話していなければ言い訳が出来そうだが、会話をしていれば面倒なことになるだろう。たぶん美希はそれが言いたいのだ。

二人がしばらく無言で歩き続けると、家の鳥居が見えてきた。そこ

から、階段がずっと続いている。我ながらこんな所を毎日登って帰宅しているのに感心するな……。

美希は階段を見て立ち止まった。

「……はあ、面倒だなこれは」確かにおっしやる通りです……

「ちょっと、まって」俺が歩き出そうとした時、美希は俺を引き止めた。

すると、美希は鞆から小さな笛を取り出し、口にくわえた。

彼女が吹くと甲高い音が響き、風が舞う。

その突風に目をとじると、近くで翼が風を切る音と獣のうなり声のような物が聞こえた。

目を開けると翼の生えた狼がそこにいた。大きさは人間より一回り大きい。

白い毛並みがフサフサとして可愛いかも知れないが機嫌を損ねたら食べられてしまいそうな圧迫感がある。瞳は緑色で額には青色の印（ヒツ）みたいな物があった。

「良い子だね、瑠璃丸は」

美希はその狼をあやす様にそう言った。それは、いつもその年に似合わず、みんなより先を突っ走りすぎていそうな美希が見せる初めての光景だった。

美希がただの女の子にみえてくるぞ……。

美希の声に反応するように瑠璃丸と呼ばれた狼は喉を鳴らし、美希に顔を寄せてきた。狼の巨体が美希の背の小ささのせいでよけいに目立つ。

「この上まで行きたいんだ。出来るよね」

彼女が頼むと、狼はふせをしながら喉を鳴らした。

美希は狼にまたがると、総真に手をさしのべた。

「空を飛ぶのは嫌いじゃないか？」

「えっ……ああ……たぶん」

そういつて美希は総真を後ろに乗せて狼を走らせた。

いきなり飛び立ったのにビックリして思わず目を瞑つむった。

「うわあああああ」 「あはは、なに怖がってるの？」

次第に慣れてきて目を開けると、夕日で紅く染まっている世界が目の中に飛び込んでいた風が俺達の周りをすり抜けていく。美希ははしゃぐ子供の様に笑いとでも楽しそうだった。

こいつも、こんな所があるんだな……。

飛ぶことの出来る存在“天兔族” それなのに彼女は空を眺めることしかない、自ら飛ばうとしない。こんなに楽しそうなのに、彼女は翼を表すのを極端に嫌がる……。

『何故？』 最近、俺の知らないことが多すぎる気がする。

第拾参話 天理と巫女

空中散歩はそれ程長い時間では無かった。もともと山を一つ登るだけだし、歩いてても慣れている人は10分ほどで着く。

家の神社の特徴でもある七つの鳥居の中でも一番大きい七つ目の鳥居、その前で瑠璃丸は音も立てずに着地した。俺は美希より先に降りると、巫女が並んで出迎えていた。いつもは出迎えなんてしないはずなのに……。

俺が不思議に思っていると、隣に美希が静かに降りた。すると巫女達は一斉に自分の箒はっぴを構えた。

この巫女達は天理家を守るために存在する。どこから派遣されたか知らないが、皆よく働くい人ばかりだ。いつも、俺に笑顔で話しかける彼女たちが、敵が来たように身構えていた。彼女たちの持つ箒は刀が仕込である。どんな化け物でも斬れるように細工が施されていて、その刀は彼女たち一人ひとりの力を最大限に使えるようになっていているらしい。

天理の巫女は家事を主にしているが、剣術と魔術などに関して一通りの事は学ぶのが基本らしく、もう裏では武装巫女と呼ばれるほどになっている。

俺は小さい頃から巫女達に育てられてきたが、彼女たちが時折見せる濁った目と冷たい口調で話す姿が怖くてたまらなかった。

これが、きつと彼女たちの裏の顔だと知ったのはいつからだったろう……。

そんなことを思いながら、俺は鳥居を先にくぐった。巫女達は構えを解き、深々と頭を下げた。

「お帰りなさいませ、総真様」

『様』扱いはよせといったのに……。

もどかしい感覚で総真は道の真ん中を歩き始めた。巫女達はまだお辞儀をしている。

いつもより礼儀正しくなっただけで何も変わらないじゃないか……。

安心してふり向くと、ちょうど美希が鳥居をくぐるうとした瞬間

――

「……貴様、よくもぬけぬけとっ！」

一番鳥居のそばにいた巫女が、恐ろしい形相で美希の首筋に仕込み刀を持ってきていた。

「私が、なにかしたか？」

美希は落ち着いて質問した。明らかに裏の美希になっていた。いつもの鋭い目つきはそのままにうつろな表情で、巫女達を見下ろすような口調で話し始めた。

「総真様をたぶらかして、天理家の勢力も奪うつもりかっ！」

「……どこの勢力を私が奪ったのだ？」

笑い混じりに美希は訳の分からない話を続けた。

「そもそも、こいつは一緒に来ただけで私は総史郎そっしろうに用があるんだが……」

「お前の様な汚らわしい者に当主様を会わせられる分けなكارう！」

総史郎つてのは俺の親父の名前だ。用ってなんだ？

巫女達は徐々に美希との間隔を狭めていく……全員あの時みたいな濁った目をしていた。美希は面倒くさそうに目をわずかに細めてから一瞬総真の方を視たかと思うとまたしゃべり始めた。

「私は『天童家の当主』だぞ？」「……だっ……だから何だというのだ、お前のした事は私たち一族でも“最大の汚点”ではないかっ!!！」

その言葉を口にした巫女は怒りに我を忘れていたが、周りの巫女達の顔が蒼白になっていくのがはつきり見て取れた。美希が先ほどの時とは違い、明らかに怒っていたのがわかったからなのだろう。今まで美希の裏の顔を見てきたが、いつもとは全く違っていた。

瞳がほのかに碧く輝き、この世のものとは思えない奇妙さと恐怖感を植え付ける。彼女の周りには風が起き始め、右目を隠していた前髪が舞い上がった。サラサラとした黒髪からのぞいていたその眼は左目と同様に碧く輝いていたが、その瞳孔には紅い線が走っていた。ゾツとしてしまいそうな綺麗な瞳には表情が無く、巫女達を見下していた。

「貴様・・・今、言ったな？一族の“最大の汚点”だと」

静かに美希が問うと、恐怖に怯え腰が抜けてしまいそうな巫女が首を静かに縦に振った。

「だが、教えたかは知らないが、お前はあの場にいたのか？」

「否、私は頭を抱えながら社やしほの隠れ家に身を潜めておりました」

「では何故、貴様は一族のために戦おうとしなかったのか？」

「それは、当主様の命令だったから・・・」

「では四つ目の質問だ、貴様は私のどこを見て汚点とみる」

「そっ・・・それは」「早く話せ」美希はにこやかな顔でせかすが、眼が笑っていないかった。

すると、俺の後ろで何かの陰が横切った。

「それは、総真様の前でいえないくらい凄惨せいさんなモノでした」

刃の交わる音と共に陰が姿を現す。他の巫女とは違う白く朱で飾りの付けられた巫女服、切りそろえられた長い黒髪を後ろにきっちり結び上げている。歳は俺達より少し上くらいだ、その眼は紅く澄んだ色をしていた。典型的な姫巫女と言って良いだろう。とてつもない

い形相で美希を睨んでいる。

いつもは笑顔の絶えない彼女の、こんな姿は初めてだった。

彼女は美希に刀を振り下ろし、美希がそれに瞬時に反応して、さっき問いつめていた巫女から仕込み刀を取り上げ交戦していた。

「貴様が今の姫巫女か？」身長の低い美希が押され気味になりながら、ニヤリと笑う。

それに対して彼女はしれっとした顔で答えた

「ええ、私は25代目“風の姫巫女”……」

「……烏水 京華。あなたの“汚点”を歴史にほつむるため用意された、当主様の駒です」

第拾肆話 親と子

烏水^{うすい} 京華^{きやうか}は神社の姫巫女、正確には25代目の風の姫巫女になる。元々、天兔族の中でも強い力を持つ女性がなるはずなのだが、今期にはそれが現れなかったために烏天狗の彼女が代理を務めている。本来、風の姫巫女は舞を踊り、祈りをささげる為だけの存在であるが最近はそのだけではない。普段はと言うと親父（現当主）^{てんり}天理^{てんり}総史郎^{そうしろう}の意向により、巫女達の統率や神社の警護、時折当主の手伝いや護衛などの仕事をしている。真面目で明るい性格の彼女は皆に笑顔をふりまき、仕事を完璧にこなす良い人だ。美希とは違い、特徴のないことが特徴のような顔をしている。（まあ、可愛い系の美人だけど）

だが、今は美希を嫌悪しながら刀を振り下ろしていた。殺気にも似た張りつめた空気が二人の間を包んでいた。

「まさか、“烏水”が姫巫女を務めるとはなあ」

美希は不吉な笑顔のまま京華を睨む。力はほぼ互角だが、完全に京華が我を失っていた。

「我が一族を侮辱するか！貴様は！」

とうとう、耐えかねた京華は術を使おうと美希から距離をとった。

「はい、おしまい」

その時、優しい声が響いた。京華は声の主に肩をたたかれ硬直する。美希はそれを見ると安心したように大きなため息をついた。

「遅いぞ、総史郎いままでどこ行ってたんだ？」

まるで、頭の悪い犬の覚えの悪さに呆れている飼い主のような表情

で美希は親父に聞いた。

「悪かったね、美希ちゃん、仕事に行つてたんだよ」

優しい性格がよく似合う顔をしていながらその格好は十字架のペンダントをした神主というあり得ない姿をしている天理家当主は残念なことに俺の父親なのである。

「全くだ、お前は部下に来客の知らせも入れないのか？あと、ちゃん付けするな気持ち悪い」

美希がお得意の裏の顔で睨み付けても、親父は笑顔のまま京華の後ろから会話をする。

京華はというと、驚いた表情のまま固まっていた。大丈夫か？あいつ……。

「ごめんごめん、なんか大変な事になつちやつてるね、美希ちゃん」

「だ・か・ら、子供扱いするなあああ！」

吹っ切れたように大声を張り上げる美希に驚いて、京華が正気を取り戻し、親父は物怖じひとつせず笑顔ままで話し続ける。

「……昔から、美希ちゃんは責任感が強いんだねえ感心するよ」

「黙れ、それはそうとこの周りの奴らをどけてくれ」
気が付くと京華と周りの巫女達が刀を美希に向けていた。

「こらこら、お客さんにそんな物騒な物、持ち出さないものだよ、仮にも天理家の巫女なら……その方の身分に合わせてそれ相應の“おもてなし”をしてあげよう」

親父の顔は笑顔のままだが、声は低く深くどす黒い何かが見え隠れしていた。それを聞くと巫女達は武器を次々手放し距離をとったが、警戒は解いていないようだ。

「総真様、参りましょう」俺の一番近くにいた巫女が話しかけてきた。俺はそれを無視して巫女達の主に話しかける。

「まったく、何なんだよ親父、俺はもう家に入って良いの？」

「ああ、いいよ、まったく総真も隅に置けないねえ」「うっせー、馬鹿神主」

「反抗期か？」ニヤリと笑う親父「・・・チツ、んなわけねーだろが」

「反抗期だな」今度はクスクスとしゃくに障る笑い方をする。

舌打ちと共に身を翻してさっさと歩く俺に巫女が三人ほど美希から守るような配置で付いてきた。それでも、美希の周りには巫女が三人と京華と親父がいる。

さっきのやり取りを横で見ていると嫌な気がして仕方がなかった。

『大丈夫だよな』

そう言い聞かせて俺は長い廊下を歩いていった。

《母様！！父様！！・・・誰か居ないの！ねえ！》

廊下を人形のような少女が走る、後ろには人影が迫っていた。

《母様・・・父様っ！・・・》

母親を見つけた小さな少女は希望に眼を輝かせる。

その瞬間、鈍い音と共に母の胸の辺りから光る刃がのぞき、血がにじむ。倒れる母を目の前にして彼女は声もなく泣き叫んだ。そして、母は子と最期に話すことなく息絶える。

母の返り血を浴びた少女は怒り狂ったように目を血走らせ、冷静に生き残った敵を斬り刻んでいく。少女の周りは血の海と化していた。

その青く光る目と無表情さは敵に恐怖を植え付けながら皆殺しにしていく

次第に彼女の背中には白銀の双翼が生え左翼は真っ赤に染まっていた

そこには大量の死体と肉の破片、血の腐ったような匂いの中、少女は月を見上げながら歌い続けていた。一族に伝わる古の唄いにしえを断末魔に乗せて……。

第拾伍話 儀式と取引

【天理家・参道】

美希は首筋に刃を向けられたまま、総史郎に話しかけていた。

「反抗期とは違う気がするけどな」

総真がいなくなると同時に刀を取り出した巫女達は緊張状態で、。

総史郎は、話す余裕も無かったんだ、といういつものように笑顔で受け答える

「えー何でだい？まあ、どちらにしても美希ちゃんの所為せいには変わらないさ」

「知るかつ……」

そっぽをむく美希はイライラしながら天理家の玄関の方に目を向けていた。

「ところで、美希ちゃんは何しにウチに来たんだい？」

総史郎は眼を細めながら低い声で美希に問う。美希は待っていたかのようにニヤリと笑う。

「…… “そろそろ” じゃないのか、もう14になるぞ」

美希が答えると総史郎は顔に手を当て感嘆の声をもらす。

「ああ、そういうことかつ…… フフツ、まったく可愛い子供にまで…… お前らは何がしたいというのだ。普通に、幸せに暮らすのさえ駄目だというのか」

美希はそんな総史郎を、感情の無い普段の彼女の様な表情で視ていた。

そして、美希は低く重みのある声で呟いた。

「・・・私は幸せな生活をした覚えがないがな・・・」

それを聞いて我に返る総史郎を無視して美希が明るいい声で問う。

「・・・場所を変えた方が良い、どこか借りられるか？」

「いいよ、部屋なら余ってるからね」

【天理家・屋敷内】

広々とした屋敷の中は、天理家の力の強さを表していた。神職で代々暮らしてきた天理家がここまで大きく成長したのも、天兔族と信仰心のちからである。

幾つあるか分からない襖ふすまの列の奥、札が貼られた襖があつた。不気味に感じるその襖を巫女達が開けても、特に変わりはなく普通の畳ぐらゐの大きさの部屋が一つあつた。

「外は四重、所々六重に結界を張ってるな」

感心しながら部屋に入る美希に総史郎は、当たり前だよ、とだけ返した。

中には掛け軸と、いかにも高そうな壺つぼが一つ、後は座布団が敷かれているくらいだ。畳と煙の香りが充満している。

「香を焚いている・・・」嫌な顔をしながら美希は座布団に座る

「まあ一応、君は重要危険人物なわけなんだよ。好き勝手暴れてもらつては僕も困るからね」「初めて聞いたよ、私は危険人物なのか？」

「少なくとも、遠い親戚として僕はそう思っていないけど保険があるに越したことはない」

「確かに、その意見は正しいな」

その言葉を聞いて安心したように総史郎は反対側に座つた。

「で、用件はなにかな？」笑顔で聞いてくる総史郎に美希は答えた。
「さっき言ったはずだが？」「……質問してもいいかい」
「ああ、答えられる所までは」彼女の声に合わせて煙はゆらぐ

「……なぜ、君は総真にこだわるんだい？」「それは、対の理「とわり」の中に」

いつもと口調が違う美希に一瞬困ったような顔をした総史郎は、眼に光の無い彼女を見て、気付いた顔をしたかと思うとまた話を続け始めた。

「君は総真を不幸にさせたいのかい？」「……否いな、我はそれを望まない」

「では、何故そう急かす必要が？」「時が近い、“最悪の事態”になる」

「君としては、どうしたい」「クロノスはまだ未熟すぎる、実践はおろか知識もないままであっては、すぐに“飲み込まれる”」

「だから、ある程度の教育が必要だと」

「……是ぜ、我とて最悪の事態に飲み込まれる危険性がある」

「それを何故この時期にする」

「トーナメントが野桐中で開催される、それに乗じれば気付かれる可能性は低くなる」

「では最後に、君にお願いしたい事がある、聞き届けてくれたら君の望み通り、総真を君に預けよう」「……是ええ、それが私に出来るのならば」

「最後は自分自信で答えたね」はあ、とため息をつく総史郎に不気味な笑顔を向ける美希。

「七つ問い”古くから伝わっていた儀式の一つだね。正確な情報を教える為に使われた技であり、すさまじい精神集中を要する。ある天兔族が神々からの言葉として一日一回七つの問いに答えたのが始まりだったっけ？」

「まあどうでも良い、私は用が済んだ。それで願いとは何だ？」

それを聞いてにっこりと笑う総史郎に美希は冷や汗をかいて顔をゆがませた

第拾陸話 髪飾りと願い

「・・・願いとは何だ？」

そう聞く総史郎はにっこりと明るい笑顔をした。

「僕も考えてはいたんだよ、君たち二人の力を弱める方法は・・・」

小さく襖が開き、京華が顔を出す。

「コレの制作にはかなりの時間がかかったよ。だって、君たち二人の能力は相反あいはんしながら同調していたんだからね」

京華は総史郎に小さな桐の箱を手渡し、静かに部屋から去っていった。

「・・・同調？」

そんな京華の姿を睨みながらも、落ち着きながら美希は総史郎の話に耳を傾ける。

「そうだよ、だから片方が封じられていても、“もう片方を封じなければ”意味がないんだよ」

自慢げに語る総史郎を美希は見上げ言葉を紡ぐ。

「ああ、なんだ、そんなことか・・・」

心のないその返事に総史郎は顔をゆがませた。

「・・・それなら、前から知っていた。だから私は、あの日に創造しておいた“もう一人の私”を覚醒させる事によって、半自主的に力を封じたんだ」

まるで他人事のように呟く美希。

「やっぱり美希ちゃんも凄いな、いつも僕たちの先に行く・・・」

いつも笑っている彼が見せる赤茶色の瞳は冷たく、表情はいつもより凜としていた。

「でも、君だけ安全な領域にいるのは不公平じゃないかな？」
「・・・世の中に公平などあるものか。と言いたいところだが、私はお前に約束をした。その願い、聞き届けようではないか」
「だから、君にコレをつけてほしいんだ」
桐の箱から取り出したモノ。それは鈴の付いた白い組紐だった。

「機械じみた感じではないな」
驚いたように言う美希に総史郎は平然と答えた

「コレは古来より我が一族に伝わってきた、封じる方法の応用みたいなモノだ、学校に行くときはもちろん出来ればなるべくほどかないようにしてほしい」

「どこに結んでおくんだ？」

組紐を手に取りながら総史郎に問う美希

「腕や首・・・いや、髪に結んでもらった方が自然かな」
ではそうしよう、といった美希は長い髪を手櫛で結び上げた。

「何も起こらないなあ」

頭を左右に揺らし、鈴を鳴らして遊ぶ美希。

「そりゃ、そのために香を焚いたんだから」

そう言つて、そこら辺に漂う煙をなでるような仕草をする総史郎。

「一番最初に君は気付いたでしょ、この香は能力者の力を弱める。だから、多少力が弱まっている状態にしておける。力が弱ければ反動もすくない」

「なるほどなあ、ちなみに聞いて良いか？」

「なに？美希ちゃん」

そこには、いつもの満点の笑顔に戻った総史郎がいた。

「制作者は誰なんだ？」

「それは・・・僕。と言いたいところだけと“烏水 椀”だよ」

「ああ、なるほど」

美希は左目を隠している前髪を掻き上げ、もう一方の目で気だるそうに遠くを見つめていた。

「合ったことあるのかい？」

あごに手を当てながら考え込む総史郎。

「いや、そうじゃない。私のデータがどこで漏れたか心配しただけだ」

「それなら、全て破棄させてもらったよ“他家”にわたると面倒だからね」

「両家共にコレがばれると大変だからなあ」

立て膝をしてため息をつく美希。行儀悪いよ、とニコニコしながら言う総史郎は怒っているわけではなさそうだ。

「総真をこれからどうするんだい？」

「別に基本的なことしか教えないさ。あいつは鈍いからな」

「ああ、分かるよ。誰に似たんだろうね」

「・・・お前じゃないのか？」皮肉を言う美希は楽しそうに微笑む
「僕？どうなんだろうねえ」とぼけた様な口調で総史郎は返してきた
それからしばらく、二人は含み笑いをしながら愚痴をこぼし合っていた。

数十分後

総史郎が一呼吸置いてから少し張った声でしゃべり出す。

「それでは、これにて本家緊急会議略式、締めとさせていただきます、この度はわざわざご足労頂きありがとうございます・・・」
それに割り込むように、美希は艶のあるしっとりとした声色で続けた。

「これからも、良き平穩が続くよう、努力して参りましょう」

相手を見据える美希の容姿はやけに大人びているように見える。照れくさそうに微笑む彼女を総史郎は暖かな笑顔で見返していた。

番外編 天の川

「おい、総真ちよつと頼まれてくれないか？」

俺が帰ってきた矢先に親父はそう言っただけで笑っていた。

「珍しいな、親父が俺に頼み事なんて」

だだっ広い玄関で靴を脱ぎながら俺はそう返した。

俺の家はこの辺では結構大きい神社だ。

そして、このいつもニコニコしている親父は神主のくせに十字架のペンダントを着けている。小さい頃なぜかと聞いてみたら、彼は困った顔をしながら、「世界に神様は沢山いるから、みんな平等にウチは扱っているんだ」と返してきた、後から巫女達に問い正したら「基本は天兔と天子の神々を祀っています」と言われた。

そんな話はさておき、“珍しい”と返したのは神主は巫女達に命令を下し、『天理家当主』としての働きをする。家事とかの些細なことでも、彼女たちが動くのが普通だったからだ。

「総真のほうが良いと思ってね」

笑顔でそう言う親父だが、コレは何かたくらんでいる時の笑顔だ。

一応、親子だからそれ位分かる。だから、俺は嫌々な顔をしながら言葉を返した。

「へー、んで内容は？・・・」

親父から渡された地図通りに進むと、俺の家より一回りくらい大きいそんな武家屋敷？いや極道の本家という印象の家があった。（なんか、来たことある気がする・・・）

そう思いつつ大きな門の端にあるインターフォンを見つけた。外が

木製になつてはいるが至つて普通のインターフォンだ。思い切つてならしてみろ……

しばらくして声が聞こえてきた。

「どちら様でしょうか」

か細くも芯のある声、たぶん女性の声だろう。

「あつ……えつと、天理家当主の使いで来ました」

「ご用件は？」

「とつ、当主様への土産物だと聞いています」

親父の言われた通りに話すと門が少しづつ開いていった。

「……許可が出ました。どうぞお入り下さい」

開ききつたところで中に入ると銀髪で瞳が金色の娘がいた。

歳は俺より少し上。そして、驚いたことに美希にそっくりだ。

「ご案内いたします」

声からしてさっきの人だろう。悪意のない笑顔でいることについては、美希とは大違いだ。

かなり大きな屋敷だが人の気配がほとんどしない……

沢山の襖だけが一つの絵を造り上げながら廊下を占領していた。

不自然に思いながら彼女に案内されると、そこは8畳ぐらいの部屋で奥の障子が開いていた。

生ぬるくなつた風が部屋を通り抜ける。縁側に腰を下ろしたその姿は凜としている。

着物姿の彼女は空を見上げながら呟いた。

「今年は、晴れたか」

良く通る艶っぽい声が響く。目を疑った、あまりにも哀しい顔をしてきたからかも知れない。(まさか、あり得ない)

“そこにいたのは紛れもなく天童美希だった”

しかも、片方小さかった翼は元通りになって、時折パサパサと動かすと銀色のハネが床に落ちる。紫から群青色に変わるうとする空の色がその輝かしさを際だたせていた。

「怖い」

綺麗を通り越してそんなことを思った。

「おい、お前誰だ？」

うっかり口に出してしまった言葉に、彼女はすぐさま反応したものの、気にもとめずに空を見つめ続ける。

「私は、天の歌姫^{そら}、^{セイレーン}、白銀の天子、ウラノス・・・色んな名前で呼ばれてきたけれど、一番古くて一番長い時を天童美希と呼ばれて過ごしてきたわ」

それは、まるで自分が本人ではないと主張するような口ぶりだった。

「じゃあ、天童家の当主って呼ばれたことは？」

「ある、当たり前よ。今でもそうなんだから」

つまらなそうにため息をつく美希を見て俺は恐る恐る距離を縮めていく。

「へー、ってことはコレは美希への届け物だ」

渡したのは掌くらいの長方形のうすい箱。藍色のそれに銀色のリボンが装飾されている

「誰から？」

「・・・俺から」

不吉な笑顔を浮かべる親父の頼みを聞いたのはコレが理由だ。

「何故？」

「今日が7月7日だから^{たなはた}」

リボンを解きながら彼女は言った

「お前の家には七夕に物を渡す習慣でもあるの？」

冷静な顔、落ち着いた声で悪態をつく美希

「無いよ、偶然今日だっただけだよ」

あけてみるとそれは小さな黒いハネの付いたネックレスだった。

美希は少しだけ嬉しそうに微笑んでから、正気に戻り喋り出す

「烏^{カラス}どもの羽など興味はない」

「あれ？美希は烏天狗達の羽と漆黒の天子の羽との見分けがつかない訳ないよね？」

少タイラついたので挑戦的に返してやると

「当然だ、分かっているわざとそう言ったんだ」

「ああ、そうですかっ！」

含み笑いをする彼女にやけくそ気味に返す俺。まさか、さっきの口調もわざとでした？

「……？。それは何だ？」

まるで、好奇心旺盛な子狐を見ている気がした……。

彼女が指さしたのは俺の隣に置いてある風呂敷に包まれた酒瓶だ。

「コレ？」

「そう、それ！」

「親父に持たされた神酒だよ。大吟醸……だっけ？」

「よこせ！」「えっ？」

注 お酒は二十歳になつてからですよ、美希様？

「は・や・く・あ・け・ろ……！」

たぶん今、彼女に尻尾が生えていたら左右に大きく振っていただろう。

美希の輝く瞳はまっすぐ俺の手元に向いていた。

(いつもより表情豊かなのは何ですかね……)

俺から酒瓶を奪い取って大事そうに抱える美希はさっきの銀髪少女

を呼んで杯ひかじきを用意するように促している。

「酒は駄目なんじゃないか？」

(今日はやけにテンションの上がり下がりが激しいな……)

「弔うらたいと祝いの席ぐらいイイじゃん、酒はそのために在ると言っても過言じゃない」

自説によほどの自信があるのか、美希は腕を組みながら力強く首を縦に振っている。

「俺には理解できん」

まあ、いいさ。といって用意された杯に酒を注ぐ美希。

彼女が一杯飲み干す頃にはもう日が落ちていた。遠くで蛙かわずの鳴く声が響く。

「……私はこの日が一番嫌いだ」

追憶をたどる様に星空を見上げる美希。その言葉に俺は応える資格は無いと思っている。

そう、今日は7月7日。彼女にとって祝いの日であり弔うらたの日でもある。

「……ほとんど憶えていないんだが、感覚だけは残っているんだ。今でも時折、悪寒が止まらなくなる」

俺は、独りで肩を抱きながら小さく震える美希の姿を、思い浮かべていた。彼女がどれだけの事を体験したのかは、皆にひた隠しにされてきたから、ほとんど知らない。

「全く、こんな私が家をまとめていて良いものか……。こんなに、臆病で弱い私が何故生き残ってしまったのか……」

だから、四年前ここで何があったのかは知らない。だが、彼女の哀しげに嗤う表情を見るとどうしても言葉が出てしまう……。

「誰にでも嫌な事くらいあるさ、消してしまいたい記憶もある。でも、そんな中で強く在ろうとする美希は、臆病じゃないと思う」

俺は、空になった杯に酒を注ぎながら、俯いた美希の顔をのぞいていた。

「いや、私はそんな大層なモノじゃない。それからの三年間は皆にとってもいえない事をしてきたんだ……」

陰気な空気に耐えきれなくなった俺はわざと明るい声で言ってやった
「そんな俺しらねーし、ずっと背負^{しょ}つてると肩こるぞ」

隣の顔を見たくなくてそっぽを向きながら……

「だから時々、誰かに持つてもらえば良いんだ」

「誰かに？」

「ああそつだ、何なら俺が背負つてやる」

「……」

美希は急に黙ってから数秒……。 (てか、ふり向きづらいじゃねーかつ！！)

「……総真っ」

「なんっ……」

答える前に美希は俺の背中に抱きつきながら静かに涙を流していた。
あんなに強い奴がこんなにも弱い。面白い矛盾だな。

俺はふり向くこともせず、しばらく彼女の泣き顔を見ないよう、碧

く輝く天そらの川を見ていた。

「誕生日おめでとう、美希」

番外編 天の川（後書き）

時季が違い申し訳ありません。

初めて番外編を投稿させて頂きました。

なんかいつもと違って、いきなり仲良くなってる二人ですが
気にしないで下さい（泣）

これから『空に響く歌声』をよろしくお願いします。

第拾漆話 日常と変化

空には大きな入道雲が浮かび、蝉の音がジリジリと暑さを補助し、太陽が青々とした木々の下にオアシスを作りだしていた。昨日のことが嘘の様に、巫女達がいつも通りに俺を見送る。

「・・・梅雨もあけたなあ」

季節は夏にさしかかる今日この頃、一週間後に控えた実技テストについてどうしようかと考えながら歩いていると、大きな古めかしい門の小さな扉から、これまた身長の低い女子が出てきた。

「おはよう、今日の天気は快晴ですね」

そしていきなり話しかけてきた・・・。

「そうかもしれないな」

「ところで、話は聞いていますか」

なんか、自然と一緒に登校してるのが不自然すぎる。昨日までほとんど口も聞かずに無視してきたくせに、何考えてやがる。総真は警戒心を持ちながら美希との話を続けた。

「話って何だ？聞いてないぞ？」

「ツチ、あの平和ボケが今度あったらどうしてくれようか！」

「瞬彼女が鬼のような形相になった気がするが気のせいということにしておこつ。」

「とにかく、これから一週間お前に特訓を仕込んでやる」

「はいいいい！？」

「テストが近いからなあ、頼まれたんだよ」

「誰につ……親父か？」

意味深な笑みを浮かべる所からして、アタリだろう。

「理解できた？じゃあ、第1段階として、お前は私の組織に入ってもらおう」

「ついてけねーよ、んで組織って何だ？」

「能力自警団“天組”」

胸を張って言う美希についていけず、呆れた顔になっている総真はため息をつきながら言った。

「……暴力団の間違いでは？」

今一番、裏社会で名をはせている集団、それが天組だ。巫女達の話にも良く出てくる。

「失礼ね、一応国が認める第二級警察組織って事になってるんだから」

「警察？んなわけ……」

「……あるんだなーコレが、ちゃんと国から給料が出る」

「世の中の税金をもっと他の所に使えよ」

「一理あるわね」

頭を抱えて悩む総真をよそに納得している美希は学校より生き生きとしていた。

「と、言うわけで放課後天童家に集合だから」

「はいはい、分かりましたよ」

よし、とご満悦になり急いで先を歩いていく彼女から鈴の音が聞こえる。ああそう言えばあの髪飾り前まで無かったような気がする。

総真はどこか遠くへ彼女が行ってしまふような錯覚にとらわれた

学校に着くといつものメンバー篠原しのはら 悠斗ゆうとと勝呂すぐろ 啓太けいたが待ちわびていたように俺に寄ってくる

篠「おはよう、総真くん」

勝「よう！……って言うかお前浮かない顔してるぞ」

総「はい？」

「そうだね、元気ないみたい」「さては……」

ニヤリとする勝呂を見て総真はろくな事ではないと予見し、話を切り上げる。

こんな日常、昨日の放課後には考えていなかった。

警戒態勢な巫女達。家に美希が入ってから周りが慌ただしくなっていたからか、疲れているのだろう、浮かない顔はたぶんそのせいだ。

美希の席を見ると彼女の姿がない……

総「おかしいな、先を歩いていったはずなのに」

篠「へー、美希さんと道同じなんだ」

総「ああ、近所っっちゃ近所だ」

勝「お前の近所は基本200m離れた近所だからな」

総「それは、俺の台詞では？」

勝「わりい、でも巫女さんと暮らせるんだろ。うらやましーぜ」

脇腹に肘を当ててくる勝呂、

(このノリだと家に来るとか言い出しそうだな)

総「奴らは性格きついぞ……特に、愛想がない」

ちようどそのころ、京華はいきなりくしゃみをしていた。「あれっ？風邪？」

第拾捌話 発表と始動

「あれ、転校生じゃん!? あんなに身長低かったんだ!」

「検査でいきなりSランクだったんでしょ」

「もう時の人だよね彼女」 「それにしても美人だな」

周りの話には一切耳を傾けず、ただ平然と歩く姿はいつにも増して凛々しい。

彼女は緊張感とそれ以上の希望を胸に抱き廊下を進んでいた。

ホームルームが始まりそうな時間になっていた。

「それにしても、美希さん来ませんね。登校中に何かあったとか・

」
確かに篠原のつはらの言うとおり、この学校の生徒は超能力者が多いためか事件に巻き込まれる例もざらにある。

「毎日定時に登校、規則正しいあいつが寝坊って事もあるまいし」

現に俺は、朝登校してきたの見てるしな

「でも、姫さんならどんな事件に巻き込まれても、自力で解決しち

まいそくだな」

勝呂すくろがそう言うのと二人とも自分の席に戻っていった。

刹那、放送が流れる。

『えー、生徒諸君聞いてほしい』

生徒会長の声だった。3年5組 浅田あさだ 琉璃しゅりはAランク、成績首位

独占という記録を持つ、武士みたいな言い回しが特徴の女子生徒だ。

『今年も最初の実技テストが近づいてきている、能力者の諸君には誠心誠意努力に励み、“できるだけ手加減”をしてほしい。なお、今回のテストでは能力自警団天組の人材派遣指揮官殿が見学される

こととなった』

学校中がざわめく、裏の仕事を行っているのは一部で、表では能力者担当の警察をしている“天組”^{てんぐみ}は学生でもその能力に価値があると判断されれば、就職できるのだ。

『そこで、今日は野桐支部の組長殿がお見えになっている。心して話を聞くように』

『今回うちの人間がお邪魔することになってしまって、申し訳ありません』

(この声はっ！美希の家にいた銀髪女じゃねーか)

総真は自分の教室を飛び出し放送室に向かって走り出していた。廊下にも放送は流れ、話は続けられる。

『こちらの選別は、順位も関係なく平等にしていきたいと思っています。すぐに就職という形ではなく、あくまで本人の意見を尊重するよう心がけるので、ご安心下さい。なお、選ばれた中学生の皆様には“仮の部活動”として参加頂きます。私たちにとって必要な人材が見つかることを祈願しております』

「着いた！」

勢いよくドアを開け……られない！鍵がかかっている
放送室は防音だ扉をたたく音も彼女たちには聞こえない！

『かたじけない、生徒諸君これから野桐中生という誇りを忘れず
勉学に励んでほしい。これで放送を終了致す』

(銀髪女は天童家の使用人だ、美希がいない理由を知っているはず
！)

総真はこの時、気付かなかった。何故なぜこんな事をしているのか、彼

女がいつも道理にいない、ただそれだけの事だったのに・・・そして自分が恐怖している事にも彼は気付いていなかった。

開かれた扉の内側にいた人間を見て、彼はとても驚いた。

あける反動と共に彼女の額にはドアの角が当たって同時に総真は倒れ込む。

誰か分からずに危険を察して、その倒れそうになる人物の頭をかるうじて右手で防ぐ

結果、見た目的に彼が美希を押し倒した様な状態になっていた

「これはっ、どういう冗談だ？」

「こつちが聞きたい、お前は何をしているのかしら？」

平然と答えるその姿は紛れもなく美希だ。しかし、その声は銀髪女のものだった。

「不謹慎だな」

腕を組み総真を白い目で見る浅田会長はそう言って扉を静かに閉じたそれと同時に美希はゆっくりと総真をどけて起きあがる

「あら、貴方も内心は人のこと言えないんじゃないか？」

今度は二人の声が二重に聞こえてくる

「そのようなことは御座いませぬ。この浅田、13歳の時分から美希様だけを見て参りました。それは、他の邪まな感情より強い誓モいであります」

陶醉しかけている珠璃を苦手な食べ物を押しつけられる子供の様な目で彼女は見る。

「・・・その言葉、他では口にしない方がいいと思つぞ」

次は美希の声、何だこいつは!?

「・・・誰なんだ？」

「その質問は何度か聞いた。もう答えるのにも飽きたぞ総真」

そう何度か聞いた、だが彼女の口から言葉を聞かなければ自分は信じられない

ソレは美希の声で、銀髪女の笑顔で、答えを紡ぐ

「妾はウラノスだ。お前の言う銀髪女でもあるが、今は天童美希と言っておこうぞ」

第拾玖話 少女と娘

「銀髪女でもあり天童美希でもある」

自称ウラノスはそう語った。

その瞳は深い青か緑色、心なしか濁って見える表情の無い眼が俺を見下す。

確かに銀髪女は美希にそっくりだった、ほとんど彼女の対として造られたような精密さは同一人物だと裏付けることが出来ない訳ではない。

ここは、能力者がゴロゴロ居るんだ、そんな能力あつたって不思議じゃない。

「どうやったたら、そんなことになるんだよ」

「ほう、妾の存在を否定しないとは・・・少しは成長したらしいな」

「否定？何の話だ？」

ウラノスは答えず後ろを向き脱力した顔をしながらそこにいる人物に話しかけた

「・・・琉璃、こいつ面倒だ。お前から話してやれ」

「かしこまりました。どの辺りまでで？」

「白兔が生まれた理由と天組のシステム辺りくらいで良いんじゃないか？」

「了解です。では天理総真くん話そうではないか、君は何が一番聞きたい？」

彼女に対する態度とはまるで違う威厳のある会長の姿を見て、切り替えの早い人だと総真は思った。

「・・・まず、会長の正体から」

「私の事から聞いてくるのは意外だ」

「正体不明の人の話を信じられない性格なんで、俺」

「それは一理あるな、私は天組の学生達のまとめ役、この学校の立場と大差ない。学生はもちろん小中高様々だがそれら全てを率いるよう姫様に命令されている」

「何故、会長は美希に従う？」 琉璃は言葉を詰まらせながら弱々しい声で話す

「……助けられたから、君には関係の無いことだ」

「大体分かった。これから、俺は会長を信じることにする。銀髪女は何なんだ？」

「白兔と言った方が無難だな、表の世界では天風あまかぜ 白唯しらゆいという名前がある。ウラノスの力を所持し、天童美希が存在するために生まれたモノだ」

「その白兔がウラノスなのか？」

「否、その力を受け継いだのは美希様本人ということが証明されている。ところが数年前、力だけが暴走してしまったと聞いている。そうなるに力に飲み込まれ、美希様が存在できなくなってしまった」

「その時、対応策として無意識にもう一人の妾、つまり白兔を造りだしてしまったのだよ」

「それが、白兔の正体であり、美希様とウラノスの力を共有するもう一つの美希様だ」

「……ややこしいだろ」

ニヤリと笑うウラノスは凜々しく勇ましい風格はあるが、幼さや悪戯ずらっぽさを感じるアンバランスな面影がある。

「じゃあ、俺は銀髪女は美希と考えて良いのか？」

「そもそも、お前の知っている天童美希は半分ではない。今の妾

が10歳まで完全に保っていた天童美希だ。理解したか」

「何となく。結構慣れたけど頭が痛くなる話だな・・・」

「まあ、一度にこんな事言われて信じろって方が無茶苦茶です」

「そうか？」美希は首を傾げて口を挟む、頷きながら珠璃は続けた
「今まで知らずに日常を送ってきたのですから、ちゃんと考えてあげて下さい」

「あと一つ質問いいか？白兔ってのは今どこにいる」

「妾の内に居るが、そろそろ離れないといけない。いい証明ともなるだろう」

ウラノスは見事な白銀の四枚の翼を広げると、双眼には紅い線が輝き出した。

すると、一人に見えていたモノが歪み始め二つに分かれていく・・・

一つは銀色の髪の毛に黄金の目、左目紅い線が走る、常に笑顔でいる娘の姿に

一つは生糸に似た黒髪に碧い瞳、右目を隠す前髪、表情のみえない少女の姿に

「理解した？（しましたか？）」「」

少女は無表情で、娘は笑顔でそう言った。

「納得したけどさ、二人が一緒の時は何て呼べば良いんだ？」

「心配するのはそこか？」

「私は主様のお名前でもよろしいかと、事実、主導権を握っているのは主様ですし」

「じゃあ、そうさせてもらおう。美希はそれで良いのか？」

「別に構わないぞ、どうでも良い話だ」

美希がそう言ったところでチャイムが鳴りはじめる。

「ホームルームが終わった様だ。生徒会長がサボっているのは示しが付かないから、そろそろ私は失礼させてもらおうよ」

「ああそうだ、放課後こいつを本部に案内及び天組についての説明を頼む」

すると会長は美希にかしずきハキハキとした声で告げる。

「美希様のお申し付けとあらば、我が身に変えてもその責務、果たしてごらんにいれましようぞ」

「・・・なんか、旧家の人みたいだな」「まあ一応はある武家の系譜の者だからな珠璃は」

早足で過ぎ去る珠璃を見送ってから二人並んで歩き出す

「ってか、身長は前の方が良かったんじゃないか？」

「五月蠅い！十歳の頃は周りより高かった！今でも少しは伸びてるんだからなっ！」

地団駄を踏む美希を見て、仕返した、と総真は含み笑いをしながら思うのだった。

第貳拾話 石碑と詩人

放課後 校舎正門前

約束の時間きつかりに会長がやってくる。

「姫様の言ったとおり君を案内させてもらう。たぶんこれから、ほぼ毎日通う場所にもなるだろうからこの地図を渡しておこう」

渡された地図？はノート一冊。パラパラとめくってみると、見慣れた風景が絵となって続いている。それが漫画の背景くらいのクオリティーで永遠と全ページに書き込まれていた。

「あの・・・これは？」

「生徒会の秘書に書かしたんだ。上手いだろう」
ドヤ顔で語る会長はさておき

「・・・秘書、おかしいって気付けよ！なんか、無駄に画力あるし。あ・・・りが・・・とう御座います？」

わかりにくい地図をもらうよりはましだったので、一応礼はしていた。

「天組てんぐみの支部なら基本的にはIDカードかパスワード、あと場所さえ知っていればどこへでも大体はいけるんだが、本部だと面倒で、その地図が最短ルートなんだ。付け加えると、姫様はおおむね本部におられる」

先程の地図といい、今の説明といい会長はやる気が空回りして方向性を間違ってしまうタイプだと推測できる。そんなことを考えながら、山の中を俺達は歩いていった。

緑生い茂る中、草を抜いてあるだけの山道は流石に辛い、やっと開けたと思ったら、その山の頂上に俺たちは降り立っていた。

「……こつて、家の裏の山じゃないですか！」

今更気付くのもどうかと思うけどな

「裏？ああ君の家か、確かにそうでもある。しかし、結界があるから気付かなかつたらう」

またしても自信のありそうな笑みを浮かべ、胸を張って会長は言う。
「ええ、気付きませんでしたよ！こんな所に訳の分からん石碑があるなんてねっ！」

見ると刀が七つ石碑を囲むように刺さっている。なんか、意味あるのかアレ

「この石碑は有名で、伝説上の起源の場所とされていると烏水先生から聞いた」

ようは、天子が最初に降り立った場所って事なのか……

「そして、石碑の文章が読める者にだけ本部に入れる資格がある。姫様は3歳の頃にこれを見つけて、遊ぶ場所として使用していたらしい。文章の意味が人それぞれ異なっているため、君の素質があるかの試験でもあるんだ」

真面目な顔をして語られても困る、石碑に書いてある文字は見たこともない物ばかりだ。

同じ文章なのに人によって読み方が違うなんて、そんなものがあって良いのか？

「……つまり、読めと」「ああそうだ」

「どうやって？」「そんなものは、自分の感覚で見つけるんだな」

石碑に向き合ってみるものの、何も浮かばない出てこない。五(+)六()感をフル回転させながら総真は考えていた。

刹那、人影が真横にあるのに気付く、見上げようとすると、何か縛りのようなものをかけられて動かない。その重みは全身に及び総真は足を地面に着く状態で耐えるしかなかった。

．．．碧き月に踊らされ、紅き海に身を沈め

．．．唄で紡ぐ言の葉は、届かざる詩人の詩

．．．天に響く孤の叫び、聞きしものは二度と帰れぬ

．．．移りゆく輪廻の中、あがき続ける者達は今何処

聞こえる声は知っている。唄っているのは誰かも解る。

声に反応するように石碑の文字の部分を光が滑る。

「．．．来ないんじゃないかったのか？」

「来ないなど私が言ったか？大体お前ごとき、こんな試験を受けたって何にも出来ないくらい見えすいた事だ、バーカ」

本当に美希はタイミングが良いな。そしていつも俺より先を平然と歩いてやがる。

「ハッ、俺だつてこのくらいできるさ」

「やってみろ、と言いたいところだが、もういい、急ぐな。珠璃だつて丸々1ヶ月かかったんだからな」

「．．．基準がわからん、美希はどの位かかったんだ？」

「このシステムを作ったのは私だぞ？石碑は元々あったが．．．小さかったからな、憶えていないんだ」

「今でも小さいと思いますか？」 「うっさい、黙れ！」
見えはしないが今、美希が内心怒ってないのは何となく見当が付いた。

「美希、そろそろ術解いて欲しいんだけど．．．」
彼女の機嫌が悪いと一生このままになりそうなので、恐る恐る頼んでみる。

「それは私ではなく石碑のせいだ、どうしようもない。本部に着くまでそこで座ってる」

「座ってたらず、歩けないじゃないか」「馬鹿か、私は歩くと言った覚えはないが？」

山に強風が吹き荒れ始める、カサカサと不気味に木は鳴き出し飛ばされてしまいそうだ。

一瞬体が浮いたと思ったら、いつの間にか何にもない真っ白な空間に三人は来ていた。

「ここどこだ？」地面が無いのに足が着いている。

「本部、正確には創作異空間と呼ばれるものだ。必要とする場所や物を提供してくれる異空間とでも言えば理解してくれるかな？」

「用は、望めば叶う夢の楽園。ここで天組本部が欲しいと願えばそこに行ける」

美希が一步踏み出すと白かった画面が花びらと化し舞い落ちる。

そこは見覚えのある場所、大きな畳の座敷に座布団が幾つも並べてありどれも空席だ。右端と左端の場所だけ少し床が高くなっていた。あの時、つれて来られた部屋と同じ。

七年前の記憶が総真の中で渦巻いていた。

第貳巻話 歓迎会はしんみりと

「・・・ここって」

あ然とする総真をみて、美希は首を傾げる。

「来たことあったか？」

「いつ・・・いや、何でもない」

本当は、来たことはある。俺の記憶はそう告げていた。忘れもしない、今やっと少しだけつながつた。あの綺麗な女の子は絶対美希だ。じゃあ隣に座ってたのは美希の両親か？

でも、何で俺はあの時ここにつれて来られたんだ？

結論が出るとまた疑問が生まれる、そんなことを総真が繰り返しているうちに、現実では会長が解説を続けていた。

「ここは、天兔族が重要な会議をするために作られた場所を再現している。かつては実際にあったのだが、一部焼失して使い物にならないのでこちらに移転している。真ん中の柱で各家の分家と共存している家柄の代表が分かれて座るのがしきたりだ」

会長の言っていることはほとんど耳に入っていない

(こんな所に俺を連れてきて何がしたいんだよっ！美希！！)

混乱の中一人の少女を責め続けていると聞き慣れた声が反対側から聞こえて来た。

「おっ、美希ちゃんからご指名なんて嬉しいね」

気が付くと左端の席にはいつの間にか親父が座り、相変わらずの満面の笑みで(一種のポーカーフェイスでもあるが・・・)俺を無視して彼女に話しかける。

「うっさい平和ボケ、息子が今から世に出るんだ。お前が見届けな

くてどうするんだ!？」

美希は顔をしかめてため息をつき、「相手をするのが面倒くさい」と周囲に視線で訴えかけていた。

「全く美希ちゃんはおままだね、僕の苦勞を台無しにするんだから」

そんなことにも気付かず(?)美希のカンに障りそうな暴言を吐く親父。だが、それに反応したのは本人ではなくその隣にいた会長だった。

「姫様がわがままだと!？そう言う貴方の方がわがままなのでは?」親父を睨みつけ声を荒げる会長、怒ると凄く怖いです。

殺気立っている会長は腰の後ろ辺りに手をかけ、そこからキラリと光る刃がのぞく、猪突猛進ぎみだ。たぶん、誰の言うことも聞かないだろう……。

「珠璃、口を挟む話じゃない。話がこじれると余計イライラするから止めてくれ」

それを見かねた美希が眉間に手をあて、ソフトに怒る様子に驚いた。案外優しい一面もあるらしい、俺は馬鹿(下級)扱いただけだな。

「……申し訳ありません」「いちいち構わない方が良くぞアレには」

会長にとって美希のいうことは絶対のようだ。

黙って下がる会長を見て、親父は更ににこやかになった。

「部下に愛されてるね、美希ちゃんは」「挑発するな、マジで殴りたくなるから」

「言葉遣いが悪いよ、美希ちゃん当主なんだから」

「……親父、実はおもしろがつてるだろ」「やつぱ?気付いた?」

あははは、と総史郎は乾いた笑い声をもらす。この二人に凄い形相で睨み付けられて(会長は刀持ち出してるし)良く平気だな親父。

「さてと、総真は僕の隣の席かな？この場合」

先程のことが無かったかのように、総史郎は話し始めた。

「そうなるな。琉璃、今回はお前が進行役になって貰うぞ」

「了解です」

話の流れ的に親父の横に置かれた座布団が俺の席って事か・・・

「俺はどうすれば良いんだ？何か手伝うこと無いのか？」

小声で呟いた言葉を美希は即座に拾って呆れたようにため息をついた。

「本当に馬鹿だな、今日はお前の自己紹介が目的で幹部連中集めるんだぞ？」

自分の席に座りながら琉璃は落ち着いて告げる。

「総真君、君が主役だ。手伝うも何も君のための会をこれから開くんだよ」

わからない、会議なんて言われても一度も出席したこと無い。

元々、そういうのは全部兄貴の仕事だったんだ。

「とりあえず、座ろうか。総真」

混乱し果てている助け船を出したのは親父だった。

「良いのか？総史郎」

「ああ、たぶん平気さ。僕の息子だもん」

「では、招集をお願いします」

それは一瞬の出来事だった。美希はニコツと無邪気に微笑み艶のある声で告げる

「わかった。琉璃、頑張りなさい」

悪寒にも似た感覚が全身を走る。滅多に見ないその笑顔は、俺に向けられたことは一度もない、前だつて椀姉さんに向けての笑みだった。会長はなぜか急速に赤面して顔を背ける。

・・・パアン

美希の柏手は部屋全体に響き、この創作異空間を本当に揺らす。

「来い」

歪みが生じる空間で、総史郎と彼女は声を合わせ、反響する波が部屋中央に大きな渦を作り出した。

両家当主の言葉で、一瞬のうちに空席に座るのは老若男女様々な代表者約2〜30名。

親父の横の下の席に椀姉さんがいる、知ってる人はそれ位しかない所為かだんだん不安感が募ってくる。周りを見渡すと右側の真ん中よりの席が一つ空いていた。

「蛭様が・・・」

バツが悪そうに言う会長に美希は流すように告げる。

「言い忘れてたが、蛭は出張で国外だ、今回はそっちを優先するよ
う言っている」

「じゃあ、全員だね良いんじゃないかな、浅田ちゃん」

総史郎の言葉を聞き、珠璃は深呼吸をして声を張り上げた。

「今回、進行役を天童家当主様より仰せつかった学生部総長・浅田珠璃と申します、本日はお忙しい中、ご足労頂き有り難うございます。議題は天理家のご子息クロノス様の一件について。なにとぞ急な話なので、大したお持て成しも滞らないこと深くお詫び申し上げます・・・」

丁寧な口調でスラスラとしゃべる会長をみて俺は感心の眼差しを向けた。

その時、会長に割り込むように威勢良く美希は言い放つ。

「自己紹介大会！今日の内容はコレだ！皆が死んだと思ったクロノ

「又は生きていた。改めて初顔合わせと言うわけだ」

声のトーンがわざとらしい明るさだ、それも無表情だからなおおかしい。それを聞いた途端、ひそひそと皆喋り出した。

「どっかで聞いた話じゃのう」左側に座っていた老人が皮肉混じりに周りに言う。

「ホント、あんたが来たときも似たようなこと言われたよ？」

今度は30代くらいの綺麗な女性が右から。

「気にしないほうが良いんじゃないかな？そこはまた後日って事で笑顔を作る事もせず、面倒くさそうに流す美希。ここで口を出したのは会長だ。」

「姫様、進行役は私では？」

「・・・ごめん、次進めて」

美希はある程度明るく振る舞っているが、皆の空気は重い。親父でさえ笑顔がどことなく緊張しているようだ・・・

“喜ばしくない歓迎会”一言だとこんな感じだなたぶん。

「では、クロノス様を改めて紹介させて頂きます」

親父がさり気なく、一歩出るように促したのに従う。ってか俺何言えば良いんだろ・・・

流れとはいえ、3割も理解していない総真は緊張と混乱の中、口を開く。

張り詰めた空気は夏に似合わずつめたく刺さるように痛い。

誰もがその時を恐れて、戒めて、呪って、崇めて、望んで、願ってきた。

そう、天子ウラノス、クロノスが二人世に出るということは天兔族にとって開戦の証。

これから何があっても守り抜かなければいけない、皆の身の安寧と
均衡のために・・・

しかし、数ある天子の歴史ものがたりの中でも彼らが不運に見舞われることは
必然的な現象であり、それを乗り越えるケースはどこにも記されて
いないのだった。

第貳式話 追憶は宝物

「お初にお目にかかります、天理家次男の天理 総真と申します以後お見知りおきを」

大半を美希が転校してきた時の自己紹介を引用した。これでちゃんとした挨拶のはずだ。

こんな、強そうな人たちに悪印象もたれたら災厄、こっちがボコボコにされかねない。

必死に周りを見渡してビクビク反応を伺っていると一人がこちらに寄ってきた。

「どれどれ、顔を見せてみな」 「ふえ？」

一番最初に接触してきたのは、明るい栗毛色の短髪で腰には二つの日本刀を持つ女性。

「ふぬけた顔が総史郎そっくりだ。こいつがクロノスか？見るからに弱そうだな」

「この人は僕の幼なじみにあたる人だよ」

男勝りな勇ましさがあふれている女性は元気な笑顔を見せる。

「総史郎の方が若いのが癪しゃくにさわるがな与よいちだヨロシク小僧」

「えっ、親父より全然若く見える」

自然と口にしてしまった言葉だが、与一は笑い声をあげ涙まで出している。そこまで面白かったか？と考えながら、少なくとも悪印象をこの人には持たれていないと安堵していた。

「なかなか、いい小僧だ。私は気に入った」

……パキッ……

音の方に目を向けると、琉璃の手元の扇子が真っ二つに割れている。どうやら、与一の行動が腹立たしいようだ。怒りを必死に押さえながら琉璃は口を開く。

「与一様、次に進めても？」「ああ、構わない」

それに気付いた与一が凜々しい真面目な顔で俺の前から下がった。

「クロノス様はどうかの誰かの所為で、なんにも自分の事を理解していないそうです」

強調して言っている会長に対して笑顔を返す親父。

「イヤミっぽく聞こえるなあ琉璃ちゃん。もしかして怒ってる？」

「当たり前です、こちら側として怒らない理由がどこにあるのですか」

半ば一方的な口喧嘩が始まろうとしたとき、美希は二人を無視して話を進め続けた。

「付け焼き刃でもいい、誰かこいつの面倒みてくれないか」

「・・・・・・・・・・」

一気に静まりかえった。はい、わかりました嫌なんですな。

「予想道理の反応だな、与一はさっき気に入ったとか言ってたかっただか？」

ニヤリと笑う美希はどことなく楽しそうだ。

「私は人に教えるのが苦手だ。説明とか面倒で困る」

「天童家現当主に剣術を教えたのは誰だったかな？」

美希のニヤリとした笑みは相手を追いつめて楽しむときの顔。彼女は今、少なからず上機嫌だ。

「ウラノスは戦っているだけで身に付いていったら。アレが人にできるとは到底思えないんだが」

「褒め言葉として受け取っておくよ。他にはいないのか？強者ぞろいな集会のはずなんだがな・・・」

「……私が」

椀の言葉を聞くと同時に美希は鋭く割り込んだ。

「貴様には任せない、ウラノスやクロノスを研究とやらに使うのはどうかと思うぞ」

「わしもその意見に賛同するぞ、問題が起こる可能性は消しておきたいからのう」

前に喋っていた老人が小さく発言した。美希は明らかに敵意をむき出しにしている。

刹那、バサバサと羽が擦れる音が近くから聞こえてきた。

「まあまあ、烏水^{ウチ}の椀をいじめないでやってくださいよ」

黒髪に闇を映した様な瞳、黒い着物に黒い翼。女性と見間違っほど綺麗な顔立ちの優男。黒い印象が強烈で柔らかなテノールがよく似合っている男だ。

「カラスが何か用か？」

興味が無いといった様子な美希が無表情で言い返す。

「酷いな美希は、俺には烏水^{ウチ} 椿^{つばき}って名前があるんですけどね」

落ち着いた声で話すそいつは妙になれなれしい口調で言い返してきた。

「相変わらず女みたいな名前だな」

「しょうがないじゃん、本家はそう言う決まりなんだから」

「どうでもいい。ああそういうえば、椿は花を首から落とすって知ってた？」

彼を見据える美希はいつものように笑わない、冷たくガラスの破片を突き刺すように彼女は台詞を投げた。しかし、優男は鼻で笑う。

「美希の為だったら首から落ちたって本望^{ほんもつ}さ」

すました顔でキザな暴言を吐く彼は美希を見据えている。俺だつたら恥ずかしくて絶対言えない。余裕を見せる椿に美希は何も言わず無視を決めこんだ。

見計らつて、進行役は仕事をきつちりこなす。

「ハア、話がそれましたね、会議に戻ります。クロノス様の件は立候補者がいないということで、父親である総史郎様が任命する形となりますが、意見等御座いますか？」

「・・・・・・・・」

「賛成と受け取らせて頂きます。では、総史郎様お願い致します」

「うんそうだねえ、与一は駄目なんですよ・・・美希ちゃんはどう思う？」

「本人に聞かないんだな、まあいい。言いたいことは解つた・・・私が面倒見れば良いんだろ？」

美希は、ため息混じりに横に置いてある脇息きょしやくにもたれ掛かる。親父はそれを見て更に笑顔を作つた。

「では、結論を言い渡します。クロノス様は天童家の管理下におかれることとなります。宜しいですか？クロノス様」

頷いてみせると、珠璃は安心したように胸をなで下ろす。

「では、お前は晴れて天組の仲間入りだ。学生枠だが、ついてこいよっ。」

「・・・努力する」

目元の自然なほころびと、儂げな口元。力強く頷く彼女は天使のようだ。

美希が初めて俺に見せたその笑顔は一生忘れる事は無かつた。

突然の来訪者に驚いて目を丸くする。

「お久しぶりです、兄様」

彼女はまだ5、6歳だというのに敬語で人と話をする。

「?、どうかされましたか? 顔色が優れない様ですが・・・」

彼女にとっては当たり前なんだろうが、四つしか離れていない俺にまで使ってくるのは違和感を感じざるを得ない。

「・・・何でもない」

とりあえず、そう返したものの、彼女はまだ心配そうに俺を見つめている。無理して笑っているのに気付いているのだろうか・・・

「きょうは何の用だ?」

「別に・・・」

ふてくされて、小さな頬をふくらます姿は誰もが愛おしく思うだろう。

「お父様もお母様も忙しいのは知ってるもん」

敬語が崩れてもなお、5歳とは思えない台詞を吐く。だが、言っていることが年相応かもしれない、用は我が儘はしたい事に変わりないのだ。

「だから、ここへ来たのか・・・ハア、勉強は?」

「終わってる。ねえ、宿題終わった?」

ならば、俺は変わりに聞いてやろうと思う。

頷いて見せた瞬間、花が咲く様に笑顔が開花した。

「今日は何して遊ぶんだ?」

「空飛びたい・・・!」

控えめに呟きながら瞳は輝いている、豊かなその表情はその時だけ見せる俺の宝物だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9003p/>

空に響く歌声

2011年11月23日18時52分発行